

# 採 蓮

Siren

第二五号

No.25

# 所蔵作品紹介・前川千帆の写生帖

西山 純子



図1 (写生帖を手にした自画像)  
『満蒙風物即興』扉より  
昭和15年(1940)  
アオイ書房刊/個人蔵

った。そこで本稿では、展覧会後に判明した事柄や訂正事項も含め、写生帖各冊の概要や他の仕事との対応関係について現時点でわかる限りを述べ、また記載された文章についても一部の紹介を試みたい。

## ■ 写生帖三十冊の概要

千帆の生涯と版業については、既刊のふたつの展覧会図録を参照されたい(註2)。千帆が昭和十三年(一九三八)から住んだ東京都中野区宮里町の家は、同二十年五月の空襲で全焼して家蔵の作品や資料はすべて失われ、戦前・戦中の写生帖についても、戦局が悪化するなか、友人の厚意で愛媛県八幡浜の銀行金庫に避難させた草花の写生帖を除き、すべて焼失したとされている(註3)。

当館所蔵の写生帖は、平成十二年度に購入した。巾着に入った状態で(図2)一括購入したもののだが、巾着が千帆生前のものかどうかも含め、残念ながら来歴は不明である。表紙に千帆の手で取材地や年代が記された帖が多いが、番号はふられていない。現在の番号



図2 写生帖と収納されていた巾着

## ■ はじめに

前川千帆(まえかわ・せんぼん 一八八八—一九六〇)は、近代日本を代表する創作版画家として知られる(図1)。はじめ漫画家として名を成すが、かたわら木版画を手がけ、昭和十年(一九三五)頃からは版画に軸足を移し、その清澄かつユーモラスな造形が高く評価されるに至った。千葉市美術館は、千帆が大正期末から戦後にかけて使用した写生帖三十冊を所蔵している。当館では令和三年(二〇二二)、前川千帆の大コレクションを有する公益財団法人平木浮世絵財団の全面的な協力のもと「平木コレクション」による前川千帆展の開催がかない(註1)、写生帖もあわせて展示したが、三五〇点を超える大回顧展だったこともあり、版画作品との関連を中心にごく簡単に紹介するにとどま

は、当館で収集するにあたり、おおよその制作順で仮に付したものである。ただし使用時期は短く絞れるものもあれば長きにわたると思われるものもあり、また展覧会の開催と今回の再調査により、順序にはかなりの修正すべき点が見いだされた。それについては後述する。

使用された期間は、日付などから判断し得る限り、大正十二年（一九二二）から昭和三十三年までの三十五年間にわたる。千帆が三十五歳から七十歳の頃あたり、多半は版画家転向以降の資料ということになる。約半数が焼失したはずの戦中までのものであり、また残る半数以外にも戦後の写生帖は存在したと思われるが、なぜこの三十冊がまとめて保管されていたのかはわからない。だが既述のとおり戦中までの資料がほぼ失われたとされるなか、戦前期を伝える貴重な記録であることは疑いない。加えて、戦争末期の昭和二十年四月に岡山へ疎開した際携行し<sup>（註4）</sup>、終戦以降も五年を過ごした岡山で使用した写生帖が含まれる事実を考え合わせるならば、千帆と移動をともにし、その晩年まで傍にあつた一群であることは推測できる。

## ■各冊の概要

三十冊を一覧表にし、基本的なデータをまとめた（表1）。関連作品として、木版画と雑誌の挿図を中心にわかる限り記載したが、連作『版画浴泉譜』が特に目立つ結果となった<sup>（註5）</sup>。ただし関連の仕方にはばらつきがあり、下絵と言えるものから大まかな構図のみのもの、断片としか言えないものまでさまざま存在する。また写生帖は当然ながら発表を想定しておらず、千帆の場合も概して整然とは使われていない。上下が混在し、切り取りや白紙があり、本来の右開き/左開きとは別に、どこからどちらの方向に使われたのか判断が難しいものもある。文字も右縦書きと左縦書きが混ざり、独特の略字や走り書きのた

め判読できない、あるいは読みに迷う箇所も少なくない。

表1を補完すべく、以下各冊を簡単に紹介する。作品に関連するため温泉を主とする旅の概略にもふれ、図版は『図録二〇二一』で紹介しなかつたものを中心とする。

## □写生帖 no. 1

三十冊のうち最も早い時期の写生帖で、関東大震災直後の東京を鉛筆で速写したスケッチに始まる。当時千帆は千駄ヶ谷に住んでおり、幸い被災は免れた<sup>（註6）</sup>。関東大震災に際しては、千帆もメンバーであつた日本漫画会の同人が震災直後の明治神宮外苑に集合して展覧会の開催を決定した事実があり<sup>（註7）</sup>、これに関連するものと考えられる。スケッチは十四枚にわたつて続き、これらのスケッチから大正十二年十一月に開催された日本漫画会主催「震災画展覧会」の出品作が生まれ、同会が出版した『大震災画集』にも収録されている。千帆の視線は焼跡や瓦礫とともに犠牲者にも注がれ、焼死体を描いた生々しい図（図3、4）も存在するが、展覧会では発表を控えたようだ。『画集』にも掲載

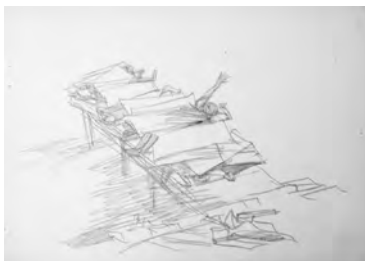


図3 写生帖no.1より



図4 写生帖no.1より 「屍橋の焼屍体」

はない。

本帖には他に、琵琶湖周辺(関ヶ原、賤ヶ岳、余呉湖、竹生島)への旅と、諏訪湖への旅のスケッチが収められている。前者の時期については、関連する木版画《雪の余呉湖》を大正十三年十一月の日本創作版画協会第六回展に出品しており、また雪の季節であることから、同年春以前と思われる(註8)。水彩が賦された雄大な山々が印象的である(図5)。後者については、表紙および内容から大正十五年二月―三月の旅とわかる。見聞きしたものを羅列した覚え書きがあるが(図6)、これは全写生帖に通底し、また後年の連作『版画浴泉譜』とも共通する千帆独特の語法であるので、一部不詳ながら引いておく。

御柱祭の標柱赤く塗った大柱、

駅頭に建つ、

雛人形の店、

四囲の山は雪、湖は少波、

ボートは未だ倉の中、

若さぎ、鮎、蛭とり、

細い舟に大い肥料桶二ツ

風が出ると湖を漕く肥料半貫動揺の

為め溢れると百姓の云草、

諏訪名物唄

諏訪の名物かりん初霜蛭のお汁

トテモゴサリマス

おめ様ホンマニ□いってくだそ□へ

駅より鷺の湯へ俵、三十銭

畔の薺、よもぎ、

「初霜」とあるのは菓子の名。後年の『閑中閑本 第一冊 文献惣糖帖』(註9)



図5 写生帖no.1より「関ヶ原の山」

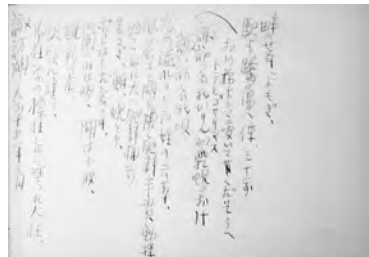


図6 写生帖no.1より  
「諏訪湖 大正十五年三月」

に見るように、千帆は大の甘党であった。また「おめ様……」と、土地言葉の音声を探集するらしいのは、やはり後年の『閑中閑本 第二十冊 街頭雑音帖』を予告する、千帆らしい関心のありようと言える。

#### □写生帖 no. 2

昭和四年二月の新潟県への旅(長岡、湯沢温泉、十日町、寺泊)の行程図から始まる(図7)。千帆の写生帖にはかような行程図が散見されるが、いずれも漫画の筆致を活かした軽妙なイラストになっている。同行は漫画家仲間の水島爾保布、田中比左良、宮尾しげを、中島六郎、京屋金介。長岡で「永田氏」のアテンドを受けている。長岡は人の背よりも高く雪が積もり(図8)、雪の好きな千帆(註10)は嬉々としてその風俗―雪下駄や橇、藁沓にかんじぎ、笠と蓑をつけて雪かきする人々―を写している。土地の菓子や「ねぎいらぬかのー」と言った物売りの声を記録し、温泉に興じる様子は、後年まで変わらぬ千帆らしい姿である(註11)。

梅園や庭園のスケッチをはさんで、昌平橋、月島、本所工場地帯などの復興



図7 写生帖no.2より



図9 写生帖no.2より

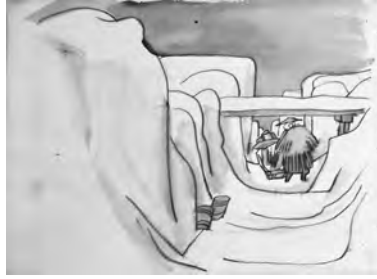


図8 写生帖no.2より

後の景色がある。これらは、昭和三年十月に結成した卓上社で制作した『新東京百景創作版画』関連と思われる。続いて、『新東京百景』と同じく創作版画倶楽部が頒布した『日本風景版画 軽井沢之部』のためのスケッチがある(註12)。実際に制作された五点とは異なる、当初の構想らしき覚え書きが添えられているのが興味深い(註13)。

本帖はさらに、同年六月の二度目の新潟県への旅の記録を取める。やはり行

程図があり、長岡、栃尾、今町、小千谷、新津、両津、佐渡、相川、小木、寺泊などを訪れたことがわかる。同行は池部鈞、水島爾保布、幸内純一、清水対岳坊、細木原青起、宮尾しげを。今町では大風合戦を見物し(図9)、長岡から山奥に分け入った虫亀村では牛の角突きを楽しみ、佐渡では鉱山を訪れている。祭や郷土芸能への関心は他の写生帖にも共通するところで、佐渡の下り羽やおけさ、野呂松人形を描き留めている。この旅は、雑誌『婦女界』の「漫画紀行 越後から佐渡へ」(池部・細木原・宮尾との共著)の取材であったと考えられる。

最後に、鉛筆によるラフな風景写生が数枚ある。なかに別府の砂場温泉や由布岳があり、由布岳には「七月廿一日」と添記されている。『日本新八景版画別府』(創作版画倶楽部)の取材であろうか。総じて充実の一冊と言え、後年の『閑中閑本』でも図柄が使用されている。

### □写生帖 no. 3

何葉かの東京風景(「目白文化村」、鬼子母神の茶店と思われる雑司ヶ谷の一角、「千住新橋」)に始まるのは、写生帖no. 2と同じく『新東京百景創作版画』の取材と思われるが、本帖の大部分を占めるのは、昭和四年九月の山陰と隠岐への旅のスケッチである。同行は水島爾保布、清水対岳(坊)、宮尾しげを、近藤飴ん(ン)坊、細木原青起。行程図で旅の詳細がわかるので略述してみると、十五日の夜行で東京を発つて翌朝京都に入り、写生は宮津から始まる。同地では「湾内舟を浮べて月見」、「十四夜の月よし」と、風流な夜を楽しんでいる。一宮の籠神社で狛犬を描くなどして(図10)、十七日に京都を離れ、山陰本線で翌朝松江に入ったようである。松江では折あしく修繕中の松江大橋や八重垣神社を訪れ、大山をのぞみ、千鳥城(松江城)の天守閣に上っている(図11)。宍道湖畔の臨川亭では「法眼栄川筆」の福祿寿を模写し、湯町では宍道湖を見



図10 写生帖no.3より



図12 写生帖no.3より  
行程図および「後鳥羽  
院天皇行在所趾」



図11 写生帖no.3より

ながら温泉につかる。十九日は日御碕、宇龍港、福性寺を訪れ、二十日に境港から松浦丸に乗船し、翌朝隠岐を訪れる(図12)。黒木御所跡(後醍醐天皇行在所跡)や玉若酢命神社、飯山古墳を巡り、貴重な駅鈴にも注目している。再興が中断している隠岐国分寺では手が落ちたままの仁王像に絵心を誘われ、付記して「国分寺の趾蕭條としてよし秋草乱れ咲く中に礎石あり」と綴る。二十二日に西郷港から隠岐丸に乗って翌朝境港に入り、美保の関や皆生温泉を巡って二十四日の東京都着、翌日の夕方東京に戻っている。帖末に、隠岐の方言による風の呼び方が採集されているのが目を惹く。この旅が何らかの仕事に関連するのかについてはまだ確認できていないが、後年の『閑中閑本』では図柄が用いられている。

#### □ 写生帖 no. 4

「三月十八日代々木西原」と記された造成地の光景から始まる。千帆は昭和三年の三月頃代々木山谷町三一六に転居しており、そこから西原までは二キロにも満たない。本帖は昭和五年の旅をメインとし、『図録二〇二一』においても同年のものと同紹介したが、転居を機に使い始めたとするのが妥当かもしれない。であれば「三月卅一日」に堂ヶ島温泉を訪れたのは同年と考えられ、宿から望む溪谷のスケッチや、長尾峠を遠望するスケッチが残されている。続く断片的な都会スケッチも、昭和四年に発表された《工場地帯1》《工場地帯2》の草稿と考えるとよいのだろう。

次に、表紙の情報から昭和五年とわかる法師温泉への旅がある。五月二日の朝上野を発ち、後閑からは自動車である。「桜、李、春の花盛り雨中佳し」と雨の旅を楽しみ、今もある「長寿館」のスケッチを残す(図13)。湯については、「古風な浴場」と満足げた。翌三日には三国峠からの眺めを何葉か写し(図14)、次のような感想を綴っている。

五月三日快晴、沢に沿ふて上る、

一里で三国頂上、途中の沢に雪残る、

こぶしの花多し、頂上の風強し、

越後の方は霞む、その中に苗場山の雪、

上州側と一ヶ月の差あり、

旧道の見へるところよし、

法師温泉から新潟県へ抜けたと見え、四日には魚沼市の大湯共同湯を訪ねる。大湯道より駒ヶ岳と中の岳を仰ぐ図を残し(図15)、遙かな未丈岳の残雪も描き留めている。

同年同月には長野県にも出かけて十日に長野図書館で、十一日に松本高校講堂で講演を行なったらしく、吉井勇、安成二郎、竹久夢二、山崎斌とともに自

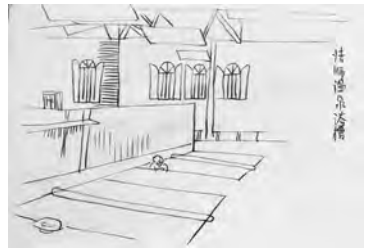


図13 写生帖no.4より「法師温泉浴槽」



図15 写生帖no.4より  
「大湯道より駒ヶ岳と／中の岳を見る」



図14 写生帖no.4より  
「五月三日／三国峠より／苗場山を望む」



図16 写生帖no.4より「番場峠上の池」

らの名を記している(註14)。この時の写生には「有明駅より／雲をかむる有明」  
「番場峠上の池」「麻積のプラットホームよりアルフス連峯」などとモチーフ  
が細かく明記され(図16)、また「番場はよいところ」で始まる番場節の歌詞が採  
集されているのが千帆らしい。

本帖の後半は草花の鉛筆スケッチに多くが割かれ、なかに牛の速写やいくつ  
かの『新東京百景創作版画』のラフスケッチがはさまれている。表1に示した

とおり関連作品は多く、美術雑誌のふたつの挿絵付きエッセイにも結実してい  
る。また法師温泉にはこの後幾度も訪れ、同地に取材した木版画が、アオイ書  
房主・志茂太郎に『版画浴泉譜』を発想させるきっかけとなった(註15)。千帆に  
あつては重要な旅であり、それを記録した重要な写生帖と言えるだろう。

#### □ 写生帖 no. 5

昭和五年五月の大島への旅に始まる。海を隔てて富士山を遠望する鉛筆スケ  
ッチから、「伊豆七島眺望」や、三原山とおぼしき噴煙をあげる山のスケッチ  
へと展開する。大島の風俗の女たちや「波浮の港」の歌詞が採集されるが、描  
き込まれた写生は多くない。

続く同年六月の旅は信州である。同行は服部亮英、宮尾しげを。「幸内田中  
不参加」とのメモがあり、幸内純一と田中比左良も同行予定だったと思われ  
る。まず訪れた上山田温泉について「六月の山青黒い／梅雨で雲去来よし、駅  
前の村、中央の水流よろし／上山田清風園に吉川英治変名してかくれゐる」と  
書き、梅雨空の第一印象とともに同宿の流行作家の名を書き留めている。表紙  
に「信州温泉」と記されているとおり温泉をメインとした旅で、山田温泉、湯  
田中温泉、渋温泉、上林温泉、野沢温泉を訪れており、それらのスケッチは後  
年『版画浴泉譜』に結実している(図17)。途中「角間温泉に横山大観の別荘あ  
り、広荘なり」とも書き残しており、穂波温泉や湯田中温泉の佐久間象山の  
碑・資料への言及もある(註16)。

さらに、同年七月の伊豆西海岸への旅が続く。文字から訪れた場所を拾う  
と、堂ヶ島、烏帽子山、手石、大瀬、石廊崎、妻良、須崎、下田といったところ  
である。行程図によれば二十八日に沼津から伊豆半島を巡り、三十日に三島  
から帰京したと読める(図18)。同行は高口、池部鈞、水島爾保布、池田永治、  
服部亮英、細木原青起か。この旅では彩色を施した写生を数多く残し、いくつ



図17 写生帖no.5より「安代大湯」



図18 写生帖no.5より

かの一枚摺に結実させたほか、雑誌『旅』の「漫画 伊豆漫畫行」(水鳥爾保布との共著)も世に出している。あるいは同誌のための取材の旅だったかもしれない。

#### □ 写生帖 no. 6

表紙を別紙が覆っており、もとの題字は「知多半島／榛名雪／塩田」と読めるが、塩田以外は内容と一致しない。遠刈田温泉の共同湯の景色に始まり、秋保温泉、赤湯温泉、青根温泉のスケッチがメインの写生帖である。文字情報は乏しく行程図もなく、この旅の経路は明らかではない。あるいはひとつの旅ではないのかもしれない。また、青根温泉については昭和十六年二月の日付とともに覚え書きがあり、遠刈田とともに同年の『版画浴泉譜』の一図となるが、本帖には昭和九十年の『第五野外小品 河』や同十年の『小部屋』と推定される作品もあり(図19)、使用された時期が絞れない。さらに、中盤に四国への旅の行程図と塩田に関連したスケッチや切り抜きの貼り込みが続く頁があり、上下も著しくばらばらで、再考の余地を残す写生帖である。とはいえ、遠刈田

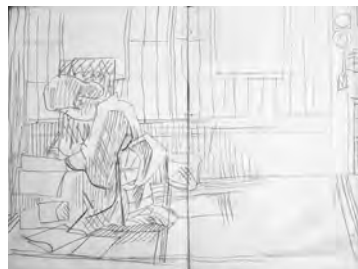


図19 写生帖no.6より

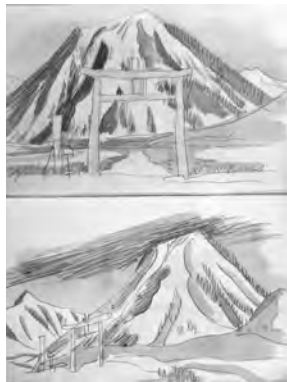


図20 写生帖no.6より

温泉のスケッチには次のような文字が添えられ、客としてはかりでなく、観察者として鄙びた温泉地の暮らしに向き合う千帆の眼差しを伝える註文。

- 三年廃湯の跡、
- 婆さん洗濯、
- 寛より湯、
- 干ものを買う婆、
- 馬のり湯治客、
- 荷もつの上の子供、
- 共同湯三棟、
- 床やも同居、

秋保、赤湯、青根温泉にも同様な覚え書きがあり、秋保へは「こわれ電車一時間揺られ」と書き、赤湯では雪のなかで「赤い頭巾の女の子／ハコ櫃で遊ぶ男の子」に注目している。また青根では雪で閑散とした温泉地の「清冽な青い湯、杉のいゝ色の森」に喜び、何行にもわたって目にした光景や土地の人に聞いた話を列記し、「雪の中に流れるラヂオニュース 山は静寂」と結んでい



る。特記される絵としては、『冬の湖』の下絵など、一連の美しい水彩があるのが印象深い(図20)。

#### □写生帖 no. 7

黒部峡谷への秋の旅に始まる。「黒部峡谷行」と題する頁があり、十一月五日から十日までの旅程と同行者(水島爾保布、池部鈞、細木原青起、服部亮英、池田永治、森川)がわかる(註)。時期については、昭和六年春の春陽会展出品作『登山軌道』との関連が推測されることから、昭和五年と判断した。この旅では、五日夜に上野を発つて翌日の朝糸魚川につき、その後富山県に入って小川温泉、宮崎海岸、泊、三日市、宇奈月温泉、黒部峡谷、黒薙温泉、鐘釣温泉などを訪れている。往路の汽車は寝台がなく眠れないが、軽井沢近くで霜の降りた景色に月が映えるのを見て「この夜良し」と書く。六日には糸魚川で相馬御風と会ったようであり、また六日と七日に「半切労働」と記すのは、滞在先の求めに応じて揮毫したという意味である。毎晩のように「歓迎宴」との記述があり、著名な漫画家たちへの歓待ぶりが想像される。一方鐘釣温泉では、以下のようなつぶやきを残す。宴とは対照的な、静かな温泉の愉しみである。

鐘釣温泉／嵐風呂、／湯口木の葉まいおちる、／夜／月明／谷を距て、／  
断がいに／対す／紅葉／満山、／雨ふれば／傘をさして／湯槽まで／雨  
か、り／冷めたし

本帖が収めるいまひとつの旅は、真冬の北海道である。同行者は記されていない。一月十日に上野を発つが、黒部への旅の後であるから昭和六年のことであろう(この旅に取材したと思しき『噴火湾』が、やはり同年春の春陽会展に出品されている)。大雪のため汽車も汽船も遅れ、翌日の午後二時半に函館入りしている。その後小樽、札幌、定山溪、白老、登別を訪れ、帰路は青森から温



図21 写生帖no.7より



図22 写生帖no.7より

海、新津を周つて十九日に上野へ帰着した。橇や角巻の女、塗り下駄といった雪国の風物を写し、小樽では馬橇(図21)や雪かき、鯉場で働く女性たち(図22)を描いている。白老ではアイヌの家を訪れたようで、登別では浴客を観察することも忘れていない。本帖の写生は概して鉛筆による簡単なものが多いが、橇のスケッチが『第四野外小品』の二作で使われている。また『小豆袋と女(北海道)』の関連スケッチがあり、取材地は小樽と考えられる。北海道で目にした景物は印象的だったのであろう、さらに後年の『閑中閑本 第二十二冊 蝦夷風物帖』の素材にもなっている。

#### □写生帖 no. 8

表紙には「戸隠山昭和十、三、／山中湖昭和十三、七」とあるが、前半と後半に富士五湖のスケッチが分かれ、間に戸隠の記録がはさまる並びになっている。戸隠への旅では、上野から「ハレ、あた、か」な北塩尻に入る。この旅の目的地は、貼付された新聞記事から、山崎斌が南条村に開いた月明塾とわか

る。山崎とは京城日報社以来の親交があり、山崎が昭和十三年に『月明』を創



図23 写生帖no.8より  
「月明村塾」



図24 写生帖no.8より



図25 写生帖no.8より



図26 写生帖no.8より 「本栖湖」

刊した際には、千帆も同人に名を連ねている註り。妻みさをが山崎の従姉妹という間柄でもあった。千帆は月明塾で女性たちが染や織に動しむ様子を見学した(図23)他、姨捨山や戸隠神社、裾花峽などを訪れている。道中、日本アルプスや浅間山が美しく見えたようだ。旅の覚え書きにはみそさざえ、かけす、うそ、啄木鳥といった鳥の名も数多く記録され、「六月初夏の鳴鳥の壮観想像に余りあり」と空想を展げている。帖末に鳥の写生が見えるのはこの時のものであるのか(図24)。また姨捨山の桂と月見堂は、以後繰り返し描くモチーフとなった(図25)。

いまひとつの旅では、山中湖の一高寮に三泊している。同行は創作版画家の恩地孝四郎、藤森静雄、山口進(註20)。既述のとおり千帆は漫画家仲間と連れ立つことが多く、版画家仲間との旅は珍しい。山中湖だけでなく西湖や精進湖、本栖湖も訪れ、充実した写生を数多く残している(図26)。真夏でも「追がに風涼しい富士の麓で、湖にボートをだしては夏草を採集し、湖畔の祭や夜の富士登山の灯にも出会った、楽しい旅だったようである。なお本帖には、《版画浴泉譜 川治》と構図が共通する川治温泉や鬼怒川の風景も残るが、後年のものと考えられ、使用された時期は再考を要する。

#### □写生帖 no.9

上下が著しくまちまちで、白紙も多く混在する。表題はなく、裏表紙に小さく「昭和十二年」とあるが、実際は昭和十一、十二、十五年の記録が残されている。写生時期と場所がわかるものを抜き出してみると以下ようになる。

昭和十一年六月二日

鬼押出、六里ヶ原

昭和十一年九月

「よき形の蕈茸家」

昭和十二年春

武蔵嵐山

昭和十二年三月十九—二十日

苗木城址

昭和十二年四月十三日

名古屋城

昭和十二年五月十八—十九日

法師温泉

昭和十五年秋

石神井三宝池

他に年月の記載のない「桶狭間附近」があり、名古屋行の一連と思われる。また「石神井三宝池」の近くに「世田谷豪徳寺付近」とあるのは、昭和十五年の写生と推測できる。

本帖からは名古屋城に取材した二点の大作や、戦後の《石神井三宝池》(『一本集』)、《浅間山鬼押出し》が生まれている。再びの法師温泉では格子状に線

の引かれたスケッチがあり(図27)、大作に展開したと想像される。昭和十二年秋の日本版画協会第六回展に出品した《法師温泉》が該当するのもかもしれない。法師温泉ではまた、まとまった言葉も残している。質素で清潔な温泉を好み、それを支える人々の日常を尊ぶ千帆の眼差しをよく伝えるので引いておく。

磧に河鹿鳴く、夜の浴場、嵐気迫り静寂、

女湯より月さし星よくみへる、

山の風清しく吹き込む、

一年一度の大掃除直後にて浴槽底石キレイ、

天井の木組みもホースにて洗った由頗る清潔、

依然としてランプ、

山の水豊富に流れ溢れる、

両日とも掃除にてたゞみたゞく

以前の建増沢山あり

十八日は白い雲去来する

夜半より烈風吹く、

月よし、

鳥の声案外に少し、

蠅沢山居る、

猿が京案内所にケマン草美し、

おたまき盛り、

桜未だ散り残るものあり、

法師の下の溪に沿ふ林道新緑よし、

緑色の日光、山草沢山にて応接にいとまなし、

途中の山野に羊多く飼はれ 芝犬居る

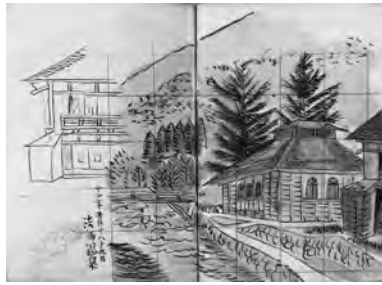


図27 写生帖no.9より  
「十二年五月十八十九日／法師温泉」

#### □写生帖 no. 10

表紙・裏表紙の両方に、内容の重なる表題を有する。他の写生帖と同様上下が定まらず、描き始めの特定も困難であるが、ふたつの旅が収められているのは表題のとおりである。

昭和十二年六月の伊豆と大島・新島・式根島への旅は、簡単な鉛筆スケッチを残すのみである。七日に出発して下加茂温泉に一泊し、大島のおんこや役行者窟、乳が崎の灯台を写すが、他にも写生帖が存在したか。同年千帆は、雑誌『旅』第十四卷第八号の特集「島の涼風線 五大漫画家ユーモアコンクール」に「大島拝見」を寄稿しており、そのための取材であったと考えられる。同文に「我々の一行」との記述があるから、他の四名―細木原青起・池部鈞・水島爾保布・池田永(一)治も同行したに違いない。

いまひとつの旅は昭和十五年十月、何度目かの法師温泉行である(図28)。紅葉が見頃で美しいが、「三国越の風寒し、黄い葉を捲き落し来る、夕刻甚だ冷へる」と書き、秋の早い到来を実感している。谷川岳の眺望を期待したが



図28 写生帖no.10より  
「無多胡溪谷/流木/十月十六日」



図29 写生帖no.10より

果たせなかつたようで、まないた岳のスケッチには「谷川は許可されず／エハカキもうれず」との覚え書きがある(図29)。詳細は不明だが、時世を考えると、野外での写生が防諜のため制限されたからではないかと推測される。

#### □写生帖 no. 11

昭和十三年の朝鮮への旅に始まる。十月十一日に下関から昌慶丸に乗って翌日午後六時釜山に降り立ち、以後大邱、伽耶山海印寺、公州、扶余、儒城温泉、京城、元山、清津、羅南、朱乙、永安、城津、平壤、開城、水原を訪れる。この旅の主目的は、京城三越で十四日から十六日まで開催された「池部鈞、水島爾保布、前川千帆、宮尾しげを、細木原青起漫画作品展」であり、会場へは十四日に出向いている。同行は細木原。開城で宮尾と合流しており、あとのメンバーには言及がない。二十一日には京城に「仁義に来」た中西立頃の弟と会い、二十三日に大島勝太郎に見送られて朝鮮を離れている。多くの写生が残り、細密かつ鮮麗な図も少なくない(図30)。

他の写生帖と同様本帖も上下がまちまちで、前後関係も一部定かでないのだが、表紙の情報に従うならば、次の旅は同年十一月の日光戦場ヶ原行である。十八日の日付が見えるが文字情報は乏しく、色味の覚え書きが大部分である。鉛筆のみ、あるいは鉛筆と水彩による風景画が八図ほど展開している。

次に来る旅は、昭和十四年一月の庄内旅行である。元日は米沢で迎え、翌日は新庄を訪れている。風景よりも、雪国の女性風俗を愛らしく描いたスケッチが多く、「鶴岡附近」と記された一図は、著名な《三角ずきん》の下絵になったと思われる(図31)。「防寒に着てゐるものいろいろ／きまりなし」との覚え書きがあり、同じ庄内地方でもさまざまな風俗や着こなしが存在することに好奇心を抱き、楽しむ様子が伝わる。

そして最後に昭和十五年九月の松の山温泉行がある。スケッチに添えて、温



図30 写生帖no.11より 「西門」



図32 写生帖no.11より 「松の山」



図31 写生帖no.11より 「鶴岡附近」

泉場の景観や「温泉節」「温泉小うた」などの写真が貼付されている。すでに森山悦乃氏が指摘したとおり(註2)、《版画浴泉譜 松の山》は貼付された写真の構図を利用してしている。スケッチは完成度の高いものが多く(図32)、また文字によっても感興が記されている。

温泉場甚だ古風の建築にて面白し、  
質朴な自炊客多し、毎朝朝市立つ由、

往来へ針金をはり夜具を干す、竿にて  
突き上げる手際、十日町より直通のバス

あり、冬期深雪にて交通至難の由、  
湯治場風景親しみ溢れてよし

凌雲閣は五丁手前の新築、文化的大建築、  
塩類泉にて相当熱し、

附近農家 葛の葉を干して馬糧に

松山鏡の傳説あり、蓄へる由 たくさん軒壁につるす(註22)

松の山ではさらに、獅子舞と思われる図や、松の山神楽の軽妙な写生も残している。楽しい旅だったのであろう。総じて充実した写生帖と言え、最後に、二葉ほど東京のスケッチを見る(「荻窪」「小金井の桜古木」)。

#### □ 写生帖 no. 12

昭和十四年五月から六月にかけての北満洲・蒙古への旅のスケッチを収める。同行は水島爾保布、坂(阪)本、森島、小野佐世男(註23)。この旅の印象は、昭和十五年にアオイ書房から『滿蒙風物即興』として書籍が刊行されている。五十のテーマからなる同書と照合したところ、本帖に三十九の下絵あるいは関連スケッチが存在した。順番は前後し、人物を加えるなどアレンジは施されているが、同書のあとがきに「殊に当時の画興の減殺されん事を慮れて、殆どスケッチブックそのまゝに修飾を加へず、聊か粗雑の感なき能はずですが、旅中の新鮮な感覚、その生々しさに、むしろ重点を於いて 素材をありのまゝに披瀝したものです、滿蒙の黄土の匂がする処が身上です」とあるとおり、写生帖の描写を極力活かしている。本帖は貴重な記録と密度の高い絵を満載するものだが、本稿では『滿蒙』に収録されていない事項を中心に、ごく簡単に紹介するにとどめる(註24)。

『滿蒙』は「鮮満国境」から始まるが、写生帖では東京駅から出国までの様子や船上の風景で始まる(図33)。新潟から月山丸で清津に入り、図們江の国境を越えて五月二十五日に滿洲(開山屯)へ入った。行程図(図34)から日付と地名を手帆の表記のまま記すと、二十六―二十七日新京、二十八日吉林、二十九日ハルビン、三十日呼蘭、三十一日牡丹江、六月一日佳木斯、二日弥栄(移民村)、三日千振、七虎力、四―五日林口、六―八日ハルピン、九―十日黒河、十一日北安、十二日チチハル、十三―十五日ハイラル(海拉爾)、十六日滿洲

里、十七日ハイラル、十八―二十日新京。そして二十一日に奉天、二十二日に安東、二十三日に京城に戻り、釜山から金剛丸に乗船して二十五日に下関に着く。梅雨の東京に戻ったのは六月二十六日の夜であった。

「殆どスケッチブックそのまゝに」とは言うが、工場や発電所、大きな建物や広角でとらえた風景(図35)、警備の様子などは省かれており、時局に配慮したものとと思われる。実際、黒龍江岸では「特務キカン頭として写生を許さず」との言葉も残している。また、『滿蒙』には本帖にない図があり、他からの切り貼りもあることから、写生帖は他にも存在したと思われる。

文字も多く、『滿蒙』に収められた以上の新鮮な印象が残されているのだが、紙幅の関係上ひとつだけ引用する。この旅の主目的だった千振の移民村の印象である。

六月三日 くもり



図35 写生帖no.12より  
「北安郊外」



図33 写生帖no.12より  
「五月二十二日ハレ」

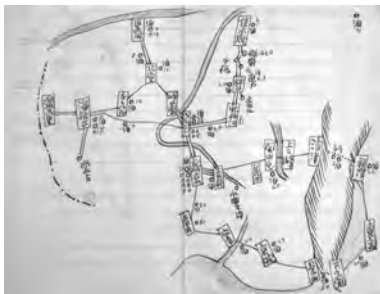


図34 写生帖no.12より

弥栄を発し千振郷に下車、  
突如として寒し、

新潟区見学

松のや旅館小憩、水悪し

□口町長さん

午後の列車にて七虎力へ

□家駅下車、本部よりの

トラックを出張所に待つ

おそろしく不潔□出張所

トラック扉こわれてゐる、コムバンドでとめる

一里余の小丘を越して走る、花盛り

兎、うづら飛び出つ、

満人の棺、骨散乱、

満州

寒さに対する認識是正

零下四〇、苦情を一ツも聞かず

乾燥してゐる、

内地へ旅して感冒にかゝると云ふ

### □写生帖 no. 13

背に「北陸」とあるとおり、福井県(芦原温泉、雄島、三国港)と石川県(和倉温泉、片山津温泉、山代温泉、粟津温泉、湯涌温泉、金沢)への旅の写生をメインとし、土肥温泉と東京近郊(奥多摩、有栖川公園、井の頭)の写生数葉が加わる構成である。北陸への旅では、和倉名物の奉燈餅や加賀名物の圓八あんころ餅のラベルを貼付し、兼六園の八寸盆や、「二尺余」という和倉産の真



図36 写生帖no.13より「七尾まだら」



図37 写生帖no.13より「片山津/山代共同湯」

鱈の速写があるなど、食を堪能した様子である。また兼六園や九谷焼の色付けを写す図があり、和倉温泉のいで湯太鼓、七尾まだらや山中節にも取材しており、女性たちが踊る姿を描いた華やかな数葉もある(図36)。現地の手厚い接待を受けた、盛りだくさんの旅が想像される。

本帖については、昭和十六年の《版画浴泉譜 土肥》の下絵があり、「昭和十八年五月」の日付のある「有栖川公園」を含むことから、『図録二〇二二』では昭和十五―十八年頃としたが、今回改めて照合したところ、昭和二十七年に発行された『続統版画浴泉譜』の《芦原》と《湯涌》の下絵があるだけでなく、直接の下絵はないものの、『続統』の各図と一致する和倉、山代、山中、片山津に取材しており、山代、片山津については近い構図もあることが確認された(図37)。前年の昭和二十六年、千帆は『温泉』の「座談會 北陸温泉マンガ行」に参加しており(『温泉』については後述する)、本帖に記録された北陸の旅は戦後のもので考えられる。土肥についても同年の同誌に「土肥温泉」(山路閑古著・千帆画)の寄稿があり、本帖に残る土肥の図が戦後作の可能性もある。使用された時期については、なお検討を要する写生帖である。

□写生帖no.14

スケッチブックではなく、罫線の入ったノートを使用している。表題のとおり三つの旅が記録されるが、彩色された頁が多く、罫線を意識させないほどに充実した図を多数取る写生帖である。

昭和十六年十月の裏磐梯への旅では、猪苗代、五色沼、小野川湖、檜原湖、川上温泉、中の沢温泉を訪れている。紅葉にはまだ早かったようだが、山道を歩きながら好きな野草を見だし、スケッチを残す(図38)。名前も数多く書き留めている。

山道に沢山ある

ぐみの赤い実

かめばしぶし

あぎのきりんざう

は、こくさの白いもの

けんのしやうこの

赤味ある花

蔦もみぢ

空には美しいうろこ

雲ひろがる

芒の銀の穂

うめばちざう

下は一面の芒原

中の沢温泉の、誰もいない湯殿を描いた一図が印象的である(図39)。戦後の名作《浴場B》(昭和二十六年)の取材地は、あるいはここかと思わせる。翌年の三月十一日には奥多摩の吉野梅林を訪れている。「快晴花四五分／川の北側既に満開」と書いており、戦中に心洗われる思いだったのではないだろう

うか(図40)。この時のスケッチから、『吉野梅林』と『奥多摩吉野梅林』の二作が生まれている。

同じ月の二十八日、恩地孝四郎、志茂太郎とともに軍道紙の紙漉場を見学している。行程は五日市からバスである。完成度の高い写生が十二図あり、鉛筆の上から墨で清書が施されている(図41)。戦中、木版画家にとつて欠かせない和紙が不足するなか、紙漉きへの関心はひとしおだったであろう。実際千帆は、紙漉きを学びながら、この時期自ら紙作りを試みている(註2)。自製は失敗に終わるが、本帖の記録はno.15とともに戦後の『閑中閑本 第三冊 記録紙漉帖』に結実することとなった。



図40 写生帖no.14より「吉野梅林」



図38 写生帖no.14より



図41 写生帖no.14より



図39 写生帖no.14より

□写生帖 no.15

紙漉きの図に始まる。「烏山」とあるので那須烏山の紙漉き場と思われ、表紙によれば昭和十七年四月の取材である。ただし、写生は二葉のみである。

ついで、同年同月の中国地方への旅が記録される。まずは岡山。同地出身の志茂太郎との旅だが、行程図に「志茂氏の差配 松岡氏」とあり、志茂が手配した案内人もいたようである。志茂の郷里(久米郡稲岡南村)に近い誕生寺を訪れているが、千帆は三年後、志茂とともにこの地に疎開することになる。その後奥津温泉、大釣温泉、津山、湯原温泉、島根県に入り温泉津温泉、湯抱温泉、海潮温泉、松江、鷲の湯温泉、三朝温泉を巡っている。この旅でも変わらず湯を楽しみ、本帖から『続版画浴泉譜』の三図が生まれている。志茂とは前年に『版画浴泉譜』を共作した仲であるから、道中次作の構想についても語り合ったであろう。温泉津を「夢二好みの古い港町」と書き、洋風建築の共同浴場を鮮やかに描く頁が印象深い(図42)(註26)。また松江では、岩坂の出雲民藝紙工房を見学している(図43)。

温泉三昧の旅をしつつも、時は戦中である。十八日の松江では空襲警報に遭い、十九日には三朝温泉で東京の空襲を耳にし、志茂が中野の自宅に電話して安否を確認している。千帆の家もまた中野にあった。

宿の女中ラヂオにて東京空襲の報ありしを語る、  
車中新聞を見てや、愁眉を開くものあり、  
上井より三朝岩崎投宿、  
正午又空襲警報あり、

午後志茂氏中野に電ワかけて様子判明する、(註27)  
同じ年の十一月には湖北を訪ねる。拾える地名は飯の浦(長浜)と塩津のみ。鉛筆とペンによる走り描きの写生が四葉しかないのは、他にも写生帖が存在したということだろうか。



図43 写生帖no.15より



図42 写生帖no.15より  
「温泉津共同浴場」

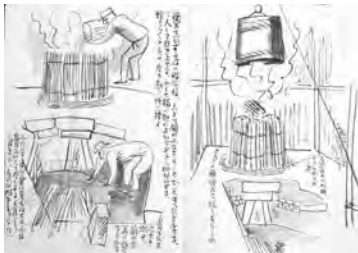


図44 写生帖no.15より

翌年二月、埼玉県小川町の製紙指導所を訪ねる。詳細なスケッチが残り(図44)、同所の「久世氏」から聞いた話も書き留めている。和紙を代用品として生産していた戦時下の製紙所の様子が垣間見える。小川町の和紙は、かの風船爆弾の開発・製造にも関わっていた。

小川町の抄紙は目下温床用(油加工)《四枚がけ》と軍用のもの(この分少し小さく長型)

材料は統制会社より渡る、パルプ粉砕やも分業

千帆は十七年から翌年にかけて(写生帖 no.14 および no.15)、四か所で紙漉／製紙を見学したことになる。これらの見聞は、第五回新文展に出品した佳作



《紙漉場》にも結実したが、同時にいかに千帆が画材の問題から気を離せない状況にいたかも想像させる。

### □写生帖 no. 16

昭和十八年四月の会津への旅に始まる。湯の上温泉と熱湯温泉を巡る二泊三日の旅だが写生は多く、緻密に描かれた図も少なからずある(図45)。またこの旅でも湯を楽しみつつ、土地の暮らしの細部に目を凝らしている。たとえば会津若松では次のように書く。

若松辺り農夫馬を曳きて働く、田甫にてタイ肥を  
処理してゐる農婦を所々に見る、山畑に大勢焚火  
してあたつてゐる、雪ふるけしき、田の草を焼く、

未だ女の人毛布を皆着てゐる、町の人は足駄穿きなり、  
新湯の露天吹雪の中て入る、夕闇迫り裸電燈

にて川の音をきゝ乍ら大によし、少しぬるいがいかん、

内湯もあり、川所々に潭をなし途中絶景の所

あり、寝ぎめの床を想はせるものあり、

水の色美し、

駅より五六町あり、

同年の五月下旬には、九州と四国を広く旅している。行程図から、熊本県の内牧温泉、阿蘇、栃の木温泉、湯の児温泉、鹿児島県の指宿温泉、霧島温泉を巡り、フェリーで愛媛県に入って八幡浜、松山を訪れ、高浜から帰京したとわかる。熊本で雄大な山景を描く(図46)他、多くの言葉も残し、天候や景観目にふれる花々、温泉場や湯のありよう、人々の風俗などを、忘れまいとするかのように書き連ねている。

同じ年だろうか、十一月に長野を訪れる。目的は鹿沢温泉と沓掛温泉である。



図45 写生帖no.16より「熱塩／笹屋の浴場」



図46 写生帖no.16より「山頂より見た／杵島岳」

旅程については簡単な行程図があるのみだが、ふたつの温泉や角間峠、烏帽子岳を望む烏帽子見橋の写生が残り、いずれも力の入ったものである。「保福寺峠」と題された頁には、目にも耳にも鮮やかな旅の印象が綴られている(註28)。

峠の下り途、田を隔てゝ小高い丘の上

山羊を曳いた爺さん保福寺峠の下の村迄

柱太く土壁燻る、障子の灯の色あたくか、秋の夜

静かに秋の夜の更けるけはひ

共同浴場の人の声賑か 下駄の音

湯の音雨かと幾度も心配させる

山は紅く庭の樹々も秋色 屋根の上に散る紅葉

廊下階段に吹きこむ木の葉

渋柿枝もたわゝに赤く熟す

優れた写生を数多く収める本帖からは、『統版画浴泉譜』が七点も生まれている。なお本帖には、「廿四、十一月／金川」「廿四十一、十六知和」などと記録のある風景画も残り、疎開して以来戦後も五年ほど滞在していた岡山(後

述)で、余白を使用したと考えられる。

#### □写生帖 no. 17

岡山時代(後述)を経て、帰京した後の写生帖である。十一月の南紀、山陰、関西への旅の記録を収める。訪れたのは和歌山県の白浜、龍神、椿、鳥取県の東郷、兵庫県の湯村、城崎、有馬など、いずれも温泉地である。優れた写生を数多く含み、『続続版画浴泉譜』が五点生まれている。とはいえ白浜では、南国調の海的美観や湯を楽しむつつ、「都会大阪勢力の雑音旗団体客引群社用族写真族／アベック新婚族／大商店の招待旅行族／赤いりボン／車中より酒もり」と、戦後観光地化する温泉場への嘆きを吐露している(図47)。椿温泉でも「和風洋風混合して次から次へと建てた家／椿温泉の発展過程を表して雑然」と書き、湯村においても、次のような手厳しい評を連ねている(図48)。

川を前に山を背にした田舎の湯の街雑然

共同湯夜の賑やかさ子供の声 湯気の中に十五日の月

活動小屋のビラ橋の上まで煙の様な湯気

温泉を利用して川岸で

洗濯炊事

大阪のラジオ天才調

浴槽の底より

照射するネオンの

色悪趣味の極致

温泉採点零

狭い街中を

大いバス通る

「温泉採点零」と書きつつ、湯気に月を見いだして自らを慰めるらしい千帆

である(註29)。なお本帖には年記が見当たらないが、『続続版画浴泉譜』や『温泉』との関連を考慮するなら、昭和二十六年と判断するのが妥当であり、後述する no. 18、19、21の後に置くべき写生帖であった。ここに訂正したい。

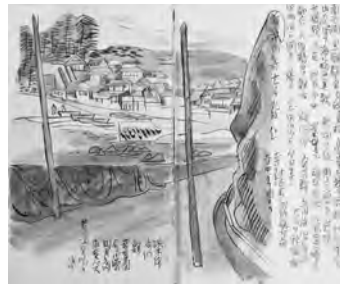


図47 写生帖no.17より「白浜」



図48 写生帖no.17より「湯村」

#### □写生帖 no. 18

戦後間もない時期の写生帖である。千帆は戦争末期の昭和二十年四月、志茂太郎の郷里岡山県久米郡稲岡南村山ノ城に妻とともに疎開した。自身にも妻にも縁のない土地だったが、既述のとおり昭和十七年に訪ねたことがあり(写生帖 no. 15)、親しみはあったと想像される。東京中野の家を空襲で失った千帆は、終戦後五年近くを岡山に過ごすことになり、本帖はその時期のものである。昭和二十二年から翌年にかけて県内に取材し、地名(あるいは集落名)としては北庄、弓削、筒井、大池(図49)、野呂、栗林公園、津山衆楽園(図50)を拾うことができる。三十冊のなかでは異質な帖と言え、千帆がしばしば描いた戯画的な人物が登場せず、文字情報もわずかであり、絵に徹している感がある。彩色がひときわ鮮やかである。帖中にただひとつ記された歌が、当時の千帆の心境を代弁するようである。

伐られたる巨き赤松大の字に道をふさげり即ちこえゆく



図49 写生帖no.18より  
「22、2、13大池」



図50 写生帖no.18より  
「津山衆樂園／四月三十日」

### □ 写生帖 no. 19

昭和二十五年五月の奥利根への旅と、同年六月の法師温泉への旅を中心に収める。本帖が岡山から東京に戻って最初の写生帖と思われる。また奥利根行は日本温泉協会の機関誌『温泉』(註30)の「座談会 川柳と漫畫 温泉カクテル」の取材と考えられることから、戦後、メディア後援の大規模な旅が始まったことを示す記念すべき写生帖と言えよう。最初の頁に「今日好日」とあり、自由に旅のできる日常が戻った喜びを伝えるようである(図51)。奥利根行では湯檜曾温泉、宝川温泉を訪ねている。座談会の取材とすれば、池部鈞、宮尾しげると同行したか。湯檜曾では新緑を楽しみ、鮎だろうか、若楓を添えた川魚を写している。宝川では清流に面した露天風呂で、やはり新緑に映える清澄な湯を堪能している。そのあとに「五月十三日夕刻香掛」「追分 五月廿九日」と付記のある風景が各一図あるが、一連の旅かどうかはわからない。

法師温泉行は、三十冊の写生帖から判明するだけでも四度目である。便利とは言えない地であることを考えるならば、よほど好きだったのであろう。こちらも瑞々しい新緑が写され(図52)、宿の二階から窓外の木々を望む眺めが、

左右反転して第九回日展出品作《温泉宿二階》に結実している。

本帖の末には、ステンシルと推測される植物の図がある(図53)。晩年、紙版を併用するようになる千帆の技法を考える上で興味深い。また帖の中央に折れ跡が残り、半分に分けて携帯したと推測される。ポケットに突っ込み、絵心を誘われるたびに取り出す千帆の姿が彷彿とする。



図53 写生帖no.19より



図51 写生帖no.19より  
「昭和廿五、／五、八九十、奥利根行」



図52 写生帖no.19より 「法師別館より」

### □ 写生帖 no. 20

昭和二十七年三月の南紀への旅のスケッチを収める。この旅も『温泉』のた



図56 写生帖no.20より



図54 写生帖 no.20より 「鬼ヶ城の大洞窟」



図55 写生帖no.20より 「上の瀨」

めの取材と思われる(座談會 南紀の湯どころ)、同行は池部鈞、宮尾しげを、小野佐世男。主な訪問先は円月島、那智、文殊の湯、潮岬、勝浦温泉、瀨峡、湯の峰温泉、川湯温泉である。温泉のほか千畳敷や三段壁、橋杭岩、獅子岩、鬼ヶ城の大洞窟、浦島忘帰洞などのダイナミックな海景が残るが(図54)、概して絵・文字ともに荒々しく、彩色はほとんど見られず、まとまった文章もない。また青ボールペンが使われるのは、戦後から晩年にかけての写生帖の特徴

である。ただし、『統統版画浴泉譜』に収められることになる温泉と瀨峡の景に、千帆らしい生き生きとした筆致を見る(図55)。また終盤に「版画」と題された頁があり、『統統』を構成する「山代」や「菅原」「龍神」など、いくつかのタイトルが列記されるのは制作計画あるいは出品計画であろうか。

版画 ◎高宮の蜃 ○白骨黄葉

△山代 浜名湖斜陽

△菅原 ○宝珠花の凧 穂高新雪

△竜神 ◎湯原月明 焼岳

余呉湖の雪、

◎阿蘇根子岳

さらに帖末、紀州雛や土地の菓子―煎餅や最中などがいくつも採録されているのは、六十代半ばになっても変わらない、千帆らしい眼差しのありようである(図56)。

#### □写生帖 no.21

昭和二十六年十月の長野県・岐阜県への旅の写生を取める。表紙に行程図があり、白骨温泉、中の湯温泉、上高地、平湯温泉を訪ねたことがわかる。本帖からは『統統版画浴泉譜』の四点が生まれているが、下絵はいずれも構図・色彩ともに完成度が高い(図57、58)。冒頭に「白骨の山は黄、紅、緑、深緑」とあるとおり紅葉の盛りだったと見え、まさに錦秋の写生が続いて印象的である。「岱」は代赭の意であろうか。上高地では、記念写真を撮る若者たちの群れやバンガローに変貌した宿に驚き、平湯ではバスの開通によりパチンコ屋が進出して「由緒ある山の農村に汚点／惜むべし」と嘆く(註3)。それでも白骨では「山は静寂／白昼／瀬の音ばかり」と変わらぬ静けさを楽しむようであり、また快晴の中の湯では次のように記して、秋酣の温泉場のよき風情を伝え

ている(註32)。

日南(向の意か)ポッコ椽側 本をよみ昼寝によく静養 都会の雑音を忘る  
白樺の黄葉食卓に飛ぶ

鬱気溪に湧く

露天湯 青空の下 深緑の湯 バスより見へる/木の間かくれ旅舎見ゆ

安房峠の登り口

熊野毛皮の敷もの

茸山の幸

溪に吹込み/吹上げる落葉甚だ興あり

いろいろの落葉

帖末には、鉛筆による珍しく長い文章が残されている。「第一次取材旅行を終りました」で始まり、今回の旅と『版画浴泉譜』の制作予定、十一月中旬に「紀州方面への第二次行」を執行したいこと(写生帖 no. 17の記録がそれにあたるか)、『閑中閑本』の進行状況への言及があり、志茂太郎に宛てた手紙の草稿と考えられる。この中で千帆は、団体客が殺到し、パチンコ屋や娼婦が出現して激変した温泉地が絵にし難いことを訴え、「事情御賢察下さい」と書いている。



図57 写生帖no.21より「中野天風呂湯」



図58 写生帖no.21より「平湯温泉」

「予算」という物言いや、宿代と交通費の高騰を理由に弁明する場面もあり、志茂が出資していた事実が示唆される。また戦後、人も風景も変わり、千帆の好む静かで質素な温泉地が少なくなつてゆくなかで制作された、『版画浴泉譜』の背景も物語つて貴重である。

#### □写生帖 no. 22

昭和二十八年三月の北海道・青森県への旅の写生を取める。訪問地は表紙に明記され、また列車の時刻や発着地、宿泊・昼食の場所を列記したりリストの青焼が貼り込まれており、旅程の詳細が判明する。青ボールペンで風景や土地の人々を描いた頁が大部分であり、それが本帖の印象を決定づけている。

三日に「第十一青函丸」で函館に入る(図59)。湯の川温泉で「三十年前の記憶全然なし」と書くのは、写生帖 no. 7に残された昭和六年の旅のことであろうか。翌日、昆布駅から昆布温泉への交通手段は馬樞である。ニセコでは雪に覆われた雄大な山々にふれてニセコアンヌプリや羊蹄山を描き、長万部から洞爺温泉を巡つた後、噴煙を上げる昭和新山にも感服して何図か残している。また登別の大湯沼では「廿年前と変りなし」と書くが、地獄谷では「記念写真や大勢/一列に並んで客をまつ、/この並び方整然と/しておもしろし」と、現代風俗にも好奇の目を向けている。七日に「白老のアイヌ酋長/宮本老夫妻特に盛装して苦小牧まで同乗」したとあるのは(図60)、昭和六年の旅での知己であろうか。その後定山溪を経て札幌で『温泉』の座談会をこなし(座談會 道南の温泉―日本風土漫畫會)、青森の浅虫温泉に一泊して帰京している。

なお本帖にはふたつの新聞記事が添付されている。ひとつは四人の漫画家の函館来訪を知らせる新聞記事で、この旅が池部鈞、宮尾しげお、小野佐世男との同行であり、また日本温泉協会の幹旋であったことが語られている。いまひとつは、浅虫温泉での座談会の新聞記事である(註33)。いずれもどの新聞かは

未調査であるが、千帆の旅の少なくとも一部が、複数のスポンサーに支えられていたことを示唆して貴重である。

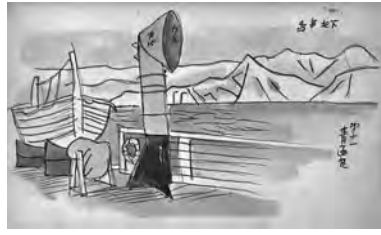


図59 写生帖no.22より「第十一／青函丸」



図60 写生帖no.22より

#### □ 写生帖 no. 23

昭和三十年の写生帖。はじめに、年記はないが同年と目される一月の宮城県・岩手県への旅の記録があり、作並温泉、鳴子温泉、瀬見温泉を巡っている。三月末には長野県を訪れる。同行は池部鈞、宮尾しげを、安齋秀夫。目的地は浅間温泉、湯田中温泉、戸倉温泉である。断片的な写生が多いが、美鈴湖からアルプスを遠望する、青ポールペンに淡彩の軽妙な図も残る(図61)。立ち寄った角間温泉では「前に来た時の印象より／づつと小さいものだったのに驚き、別所温泉でも「昔より明るくなつてゐる／湯緑色に見へる」と綴り、時の流れを痛感する千帆である。

四月には青梅の「ふじ家」や飯能の竹寺に遊んでいる。竹寺では精進料理を堪能して「猷立表甘種／實際はそれ以上」とメニューをすべて記録し、品書きも添付しているのが千帆らしい。八月には明星ヶ岳の大文字焼を見学し、箱根

小涌園も訪問している(註34)。

八月には、三月の旅と同じメンバーで新潟県の大湯温泉を訪ねている。栃尾又では「廿五年ふり／変つてない」との感想を述べる。この時大湯の野天湯を描いたスケッチから、同年の木版画《露天湯》が生まれている(図62)。

最後に、やはり年記がないがおそらく同年の宮城県、山形県、新潟県への旅が記録され、鬼首温泉、肘折温泉、湯田川温泉、瀬波温泉、高瀬温泉への訪問が判明する。本帖には、概して簡略ながら多くの写生が残され、『続続続版画浴泉譜』の作品六点が生まれている。終盤にこけしとこけしの作業場のスケッチがあり、『閑中閑本 第十六冊 鳴子こけし帖』にも結実している。さらに、『温泉』に関連記事が多いことも注目されるが、それについては後述する。



図61 写生帖no.23より



図62 写生帖no.23より「大湯野天湯」

#### □ 写生帖 no. 24

昭和二十七年と二十九年に使われた写生帖。前半と後半に二十九年のスケッチが分かれ、間に二十七年の記録がはさまる構成になっている。二十七年は十月に群馬県を訪れ、妙義、磯部温泉、榛名、葉師温泉、伊香保温泉、観音山遊

園地などを巡っている。榛名湖畔に取材した宣材のような図が残り(図63)、榛名神社では巫女の舞も見学している(図64)。この旅も、『温泉』の「座談會 群馬の温泉を語る」の取材であったと考えられる。また千帆が挿絵を描いた新聞あるいは雑誌のシリーズ記事が貼り込まれており、タイトル(「榛名湖」「妙義山」「磯部温泉」「榛名神社」「薬師温泉」「伊香保温泉」「観音山と遊園地」)が写真と一致する。掲載紙(誌)については未調査であるが、少なくともふたつのメディアの取材を兼ねていたことになる。

昭和二十九年には、十一月に福島県と宮城県を訪れている。同行は池部鈞、宮尾しげを、安斎秀夫。目的地は小原温泉、鎌先温泉、飯坂温泉、穴原温泉、天王寺温泉、土湯、東山温泉、岩代熱海温泉である。この旅もやはり『温泉』の「座談會 みちのくの湯の旅」の取材と思われる。青ボールペンによる簡略なスケッチが大半だが、『続続続版画浴泉譜』の三図に関連した言葉が残り、鎌先温泉については次のように印象を書き連ねている。

古風な家、高層、入り混り窓、椽交錯、石段、

湯治場風景、共同湯、自炊用野菜の店、媼さん、



図63 写生帖no.24より「湖畔亭」



図64 写生帖no.24より「榛名神社／巫子舞」

頬かむり、後は唄につゞく、秋深み、鳥の声、障子に柔かな陽、名物のさわし柿、バス便あり、ケーブル、近くに石膏採取場、製礦所あり、共同湯、木造、昔ながらの風情がよほど喜ばしかったのであろう、鎌先温泉のことは別の頁でも「この湯古風にて良し／家の混んだ所ク雑／野菜うりの媼さん／居る、自炊客／多し」と言葉を重ねている。

#### □写生帖 no. 25

昭和二十七年三月の「伊東の市場の浜」と題したスケッチから始まる。葛見神社の大樟や共同湯にも取材しているが、短い滞在あるいは日帰りだったか、写生は数葉のみである。以後多くの図を見るが、ランダムに使われたようで、いくつかの旅が入り組んで混在している。背文字と内容から判断すると、昭和三十三年六月の青森県への旅(岳温泉、湯段温泉、落合温泉、板留温泉)(図65)、同年十二月の箱根への旅(姥子温泉、宮の下、明星ヶ岳、木賀温泉、芦ノ湖)、時期不詳の北海道への旅(釧路、阿寒湖、温根湯温泉、川湯温泉、摩周湖)(図66)の記録である。このうち青森の旅は『温泉』の「岳と湯段、落合と板留」のための取材と思われる。スケッチは青森・箱根・北海道ともに良作があり、『続続続版画浴泉譜』に七点が結実している。覚え書きも多く、各温泉の印象を綴り、目にした植物の名を列記するなどしている。とりわけ青森県の岳温泉については、若い客が多いなかにも古風が残って心に響いたか、長く言葉を連ねている。

山に紅いうつぎ類咲く

日曜日で青年男女沢山来てゐる、

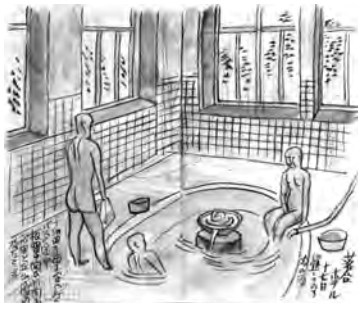


図65 写生帖no.25より「落合ホテル」



図66 写生帖no.25より「摩周湖展望台」

なお本帖には、旅と旅の間に国立競技場のトラックや観覧席をとらえた図、聖火台とおぼしき図を描いた頁がある。国立競技場は昭和三十三年の竣工であるから、同年まで使われたと考えられる。

浴舎より流れる湯の道おもしろし  
古風な型の宿、浴舎を中心に  
囲いたつ、浴舎ペンキぬりてよろしからず  
山菜、  
弘前より見た形の方がよし  
頂上480M、残雪少し、  
岩木神社の華表あり、

夕方皆引上げる元気でよし  
道埃だらけ ガタガタにて散々に  
もまれる  
宿の軒下三段になつて燕の巢、新旧キツシリ  
並んでゐる 燕沢山飛んでゐる  
途中の高原よし

本帖には整つた図もあり、『続続続続版画浴泉譜』の下絵もあるが、粗い描きぶりや判読しがたい文字が散見され、白紙も多い。三十冊の写生帖のなかでは昭和三十三年の年記が最も新しく、文字や絵の乱れから判断しても、最晩年の写生帖と考えられる。

大島へは、池部釣や宮尾しげをらと  
同行したと思われる。塔の沢温泉は、  
取材日が一致するので、今回も『温泉』  
の「箱根塔之沢の阿弥陀寺まつり」のためであつたらう。熱海では、熱海梅園の写生に茂木惣兵衛が寄贈した梅園の起源を付記している(図67)。また青梅で書いたと思われる次のような文章からは、老いを意識せざるを得ない千帆晩年の心境がかいまみえる。

劣へし吾耳にさへもろもろの禽の声に朝早く起覚む昨夜遅くまで三時頃迄眠れず、それでも七時に雨戸をくる、東天既によあけ谷の木々に陽さす  
くるみの巨木二三あり椽前の谷楓橋老木数株、

本館の軒に紅梅咲く、



図67 写生帖no.26より「熱海梅園」

昭和二十七年一月の大島への旅の記録に始まり、三十二年四月のスケッチ「立川陸橋上より」、同月の塔の沢温泉と湯本温泉のスケッチ、十月の竹寺のスケッチ、十二月の熱海梅園のスケッチ、三十三年一月の青梅の「ふじ家」を描いたスケッチを収める。三十二年以降のスケッチは、他の写生帖と同様、必ずしも日付順には並んでいない。他、秋田民踊に関する雑誌の切り抜きと関連スケッチがあるのは、昭和三十四年の新日展出品作『民踊』の準備と考えられる。



□写生帖 no. 27

木版で野草を摺刷した和紙を表紙に用い、背に「京都」と記した写生帖。旅の行程図はあるが略語のため拾えるのは「円山」「祇園」「桂」くらいである。日付のあるスケッチに昭和二十九年四月二十六日の「鷹ヶ峰へ行く路」「光悦寺の茶室の内の一ツ」「鷹ヶ峰にて」があり、日付のないものに「了寂院光悦日豫居士(光悦の墓石)」「祇園夜桜」がある。光悦を偲ぶ旅だつたようだが写生は十図ほどしかなく、過半は白紙である。彩色のあるものも走り描きに近く、粗い印象は否めない(図68)。他の写生帖と同様裏表紙に住所と氏名を記すが、本帖では氏名に添えて「東京都杉並区上荻窪一の36/渡辺医院内」とあるのが注目される。この頃千帆は体調を崩して入院していたのだろうか。これまでの履歴には見当たらず、引き続き調査が必要である。



図68 写生帖 no.27より 「29.4.26 光悦寺の茶室の内の一ツ」

□写生帖 no. 28

前半に昭和二十九年の近郊スケッチがあり、後半にだるまの制作工程のスケッチがある写生帖。終盤の十枚ほどは白紙である。近郊スケッチの季節は五月、モチーフは千川堤の葉桜、八成橋の菜の花(図69)、善福寺池。その後相模湖が描かれるが、「30.晩夏」とあるので別の季節であろう。いずれも青ポールペンで線描きし、水彩で彩色するのは後期の写生帖に通う特徴である。後半は、埼玉県越谷町大里で取材しただるまの制作工程の覚え書き。寸法や素材(色材、紙)、木型の様子、工程の詳細などが絵と文字で綴られている。自ら撮

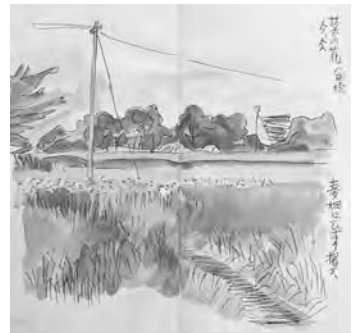


図69 写生帖no.28より 「菜の花」



図70 写生帖no.28より

ったとおぼしき写真が貼り込まれ、制作者の名前として「中村千代松」と書き残されている(図70)。だるま工房を訪ねた時期は不明だが、本帖の表紙に「近郊 だるま/1945」とあり、同年と考えてよいだろうか。この取材は昭和三十三年の『閑中閑本 第二十一冊 張子だるま帖』に結実している。

□写生帖 no. 29

鉛筆による大まかな風景写生に始まり、数枚目にダム建設と学校移転に関する紛糾、「国道工事」「法師、大浴場の屋根修繕計画 31、夏」といった覚え書きがある。詳細は不明だが、近代化して変わりゆく風景への関心と嘆きを伝えるようである。ついで、湯島温泉(群馬県)を描いた年記のない十一月のスケッチがある。後に昭和三十一年二月に大倉山公園(神奈川県)の梅林を描いたスケッチが続くので、湯島行はその前年であろう。

次に記録されるのは宮城県、山形県、福島県を巡る十一月の旅である。晩年の写生帖には珍しく詳しい行程図があり(図71)、熱湯温泉、遠刈田温泉、岨々温泉、青根温泉、秋保温泉、作並温泉、天童温泉、上山温泉、野地温泉、五色沼、桧原湖などを訪ねている。充実したスケッチも数多く残している(図



図73 写生帖no.29より



図71 写生帖no.29より



図74 写生帖no.29より  
「秋田大湯」



図72 写生帖no.29より  
「二十日/天童温泉場/バス終点」

72)。同行は宮尾しげを、他に「本名洋一氏」「佐藤孝也氏」の名もあるが不詳である。青根では「こけし工場」に足を運び、仙台では「炬バタは天江氏の酒バ、主人不在」とあり天江富弥を訪ねたことがわかる。また「天童温泉/大した事なし」などと書き、順調な取材ばかりではなかったことや、工事による足止めがままあつた事実も残されている。年記がないが、前後を考えると昭和三十一年の旅と考えてよいだろう。

昭和三十一年十二月二十日の浦安のスケッチをはさんで、三十二年五月の猿

ヶ京温泉(群馬県)への旅が続く。同行に「今村氏」とあるのは今村秀太郎だろうか。天狗の面の絵とともに、四首の歌が記されているので紹介しておく。

迦葉山の大きき天狗の赤き面その鼻いよいよ高くあるかな

上州の山の溪間の椽の樹は皆大木にして許多花咲く

五月晴の赤城の山の肩の辺にかすみて紅く山の雪見ゆ

漸くに芽ぐみし桑の稚き葉に初夏の雨柔く降る

猿ヶ京を記録した箇所には湯宿「桑原館」の平面図が貼り込まれた頁があり、裏面に制作年不詳の《山の見える部屋》の下絵があることから(図73)、この作品は昭和三十三年頃、新緑の猿ヶ京に取材したものと推定することができる。本帖にはさらに、同年(か)六一七月の宮城・盛岡・秋田・青森・福島県を巡る旅が記録されている。旅程の覚え書きによると鳴子温泉、平泉、湯瀬温泉、十和田湖、酸ヶ湯温泉、下風呂温泉、大湯温泉、那須八幡温泉を訪れている(図74)。

本帖には遠近合わせて六つもの旅が収録され、『続続続続版画浴泉譜』の三点に結実しているが、使われているのは過半までで、終盤の二十五枚ほどは白紙である。文字では、浦安のスケッチに添えられたものが印象に残る。いつもの千帆調で、目にふれたものを列記して詩のようである。

海苔干し場/貝を剥きみる女連/風よけにかくれて、/新造船五色の/吹流し、坊主経よむ、/さしみのつまの青いもの/煮ると青くなる/めもさめるばかり/海底の貝を/さらへる籠/長い木の柄/三尺ばかり/川口の小家/皆くろいトタン/剥いた貝のすてバ/石灰工場、/江戸川放水路/若い衆ヒナタボッコ/爺さんは南ボッコ、/好天にてかすみて/富士見へず

#### □ 写生帖 no. 30

表紙に大きく「九州」とあり、訪問地が列記される写生帖。同行は池部鈞と

宮尾しげを、行程図によれば佐賀・長崎・熊本・大分県の順に巡っている。行程図にはまた、この旅が宮尾の川柳仲間である長崎の川柳家・池田可宵の肝煎りだったことが記され、さらに「仕事の事 旅行中にもいろいろあつて／まともならず、その上去来忌の為に色紙など廿枚／無条件にて奉仕する／最初宿にてかくべき色紙など30枚宛かいてみやけ(土産・引用者)にもつて行く」とも書いていて、アテンドの返礼としての色紙のあり方や、この場合は不首尾に終わったようだが旅先で次なる仕事が発生していた状況をうかがわせる。

本帖は彩色が施されず、終始ほぼ青ボールペンで描かれており、絵としての見どころは多くない。武雄温泉では「この丹塗の楼門／ネオンをつける／赤青俗悪」と批判し、温泉街での拡声器による呼び込みの声にも耐え難い様子である。長崎では爆心地を訪れ、「この辺一帯に／まだ荒涼の／感あり、／埃つぽし」と印象を綴るが、原爆資料館では「記念写真、／エハカキ屋など／沢山出てゐる、／資料は原爆の／放射熱に当りし／瓦、鉄などの／変形を並べ／図解写真／多く／死人などの／凄惨なもの一切なし」と、観光地化への疑問を呈している(図75)。総じてこの旅における千帆は批判的で、別府でも、夜の灯は美しいが「突堤の先端の／酒のネオン不可」と断じている。わずかに島原の白土湖では、清冽な水に心を慰めたようである。

本帖の末には、写生帖no.27と同様「渡辺医院内」と記されている。既述のとおり青ボールペンを専らとし、乱雑な印象もあり、やはり体調を崩して入院した一時期があつたと推測される。なお、表紙の数字に欠がありno.30としていたが、この旅も「温泉」の「座談會 北九州温泉めぐり」の取材と考えられ、昭和

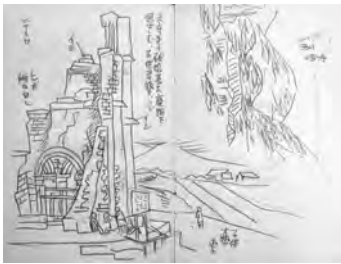


図75 写生帖no.30より

二十八年十一月に決行されたかと判断できる。よつて正しくはno.23―29より前に置くべき写生帖であつた。ここに訂正したい。

#### ■写生帖から見えてきたこと

ここまで写生帖三十冊を概観し、前川千帆の年譜を補充し得る様々な出来事―とりわけ、小型のスケッチブックであるから当然ながら、旅の記録の数々とそのあらましを確認してきた。関連作品についても多くを特定するに至り、具体的には一枚摺、連作『版画浴泉譜』、同『閑中閑本』、雑誌の仕事に大別することができるが、一枚摺では、制作時期や取材地が判明した作品も少なからず見いだされた。またごく一部ながら引いた文章からは、古風で質素な温泉への好みや、湯をとりまく自然と名もなき人々を温かく見つめる観察者としてのありかたも看取された。

言うまでもないことだが、写生帖に圧倒的に多く残されたのは、よくもこれだけ、と思わせるほどの温泉への旅であつた。そしてそれらは、ライフワークである『版画浴泉譜』に密接に関連していた。全百図のうち、写生帖に何らかの関連するスケッチが残るものは、実に五十八図を数えた。三十冊に残された旅(東京近郊を除く)は少なくとも七十を数え、そのほとんどが温泉に関わり、『浴泉譜』が正しく温泉三昧の日々から生まれたものであることが確認された。と同時に、戦後は近代化と観光地化により激変する温泉地への嘆きや絵にすることの難しさがたびたび綴られ、若き日に漫画家として最新風俗を活写していた千帆が、次第に現実と理想とのはざままで制作に悩むようになる姿もありありと観察された。

詳しくはふれなかったが、いまひとつのライフワークである『閑中閑本』とも繋がりが見られ、全二十七作のうち九作に関連するスケッチが見いだされ



図76 写生帖no.3より

た。『浴泉譜』と異なり『閑本』では取材時と時差のある例がままあり(註5)、各冊の構想を練るなかで、過去の写生帖に題材を求める千帆の姿が想像された。また『閑本』は岡山時代に第一―第七冊が手がけられたが、うち第三、四、六冊は、写生帖あつてこそ成立したものである。『第二十三冊 富士景観帖』など、複数の写生帖から図を抽出してまとめた例も数多くあり、写生帖が貴重な「ネタ帖」として機能したことがわかる。

こうした木版画、あるいは雑誌の挿画との関わりは、写生帖の造形のありようにも影響したと考えられる。千帆のスケッチは、基本的に陰影のない線画である。人が描かれるとすれば、漫画家千帆を彷彿とさせる戯画調であり、風俗や風俗も軽妙な線描を主としている。そして鉛筆による速写に墨やペンで上描きし(図76)、一部に彩色を賦するのが多くの写生帖に共通する手法であった。最初の大まかな描写から簡潔な線あるいは形を掬い、構図をまとめてゆくのは漫画家の作法とも言えるだろうが、木版あるいはイラストを想定した絵作りでもあつたろう。清書は帰宅してからの作業だったかもしれないし、後年に施したこともあつたかもしれない。

関連作品をめぐつてもう一点述べたいのは、旅の同行者とその背景である。既述のとおり千帆は昭和十年頃に漫画家の看板を下ろし、以来創作版画をメインに活動したが、写生帖から判明する限り漫画家時代の仲間と旅をすることがほとんどであった。最もよく組んだ池部鈞・宮尾しげをとの旅は、写生帖から確認できるだけでも八件を数える(註6)。そしてそれらの旅の多くは、漫画家たちの温泉巡りとしてメディアが後援するものであつた。雑誌『婦女界』(婦女界出版社)や『旅』(日本交通公

社)の企画があり、特に頻繁だったのが戦後『温泉』(日本温泉協会)が設定した取材旅行である。千帆が参加した旅中の座談会や旅行記を『温泉』誌上に探したところ、昭和二十五年七月の「座談会 川柳と漫画 温泉カクテル」から三十二年十二月の「岳と湯段、落合と板留」まで、二十六件に上つた。そのリストに関連する写生帖と『版画浴泉譜』の作品を加えたのが表2である(註7)。戦後の写生帖の多くが『温泉』と繋がり、また少なからず『版画浴泉譜』に結実していることがわかる。各冊の概要で述べたとおり、写生帖の時期と順序は判断が難しいのだが、『温泉』の記事の順に合わせると自然に並ぶ感があり、現時点では空欄となつている昭和二十八年の「山陰の出湯を尋ねて」や三十一年の「座談会 宇奈月、平湯、下呂」についても、失われた写生帖の存在が想定される。版業を軸とすれば『浴泉譜』のために旅をしたと考えがちだが、『温泉』の企画から『浴泉譜』が派生した、つまり副産物という面もあつたことは認識されてよい。創作版画家が経済的に恵まれず、それだけでは生活できなかつたことは千帆ほどの作家でも同様であつた。今回写生帖no.21に見るとおり志茂太郎の出資も明らかになつたが、漫画家としてメディアに登場することは千帆にとつて貴重な収入源であり、創作版画の仕事にも資していた事実を指摘してきたい。

#### ■回想の温泉―連載「温泉風物」と写生帖

いまひとつ、『温泉』との照合を進めるなかで注目された仕事を紹介してきた。最晩年の三年間、昭和三十三年―三十五年の連載「温泉風物」である。画と文を手がけた温泉案内であるが、すでに老境に入った千帆はもはや旅にでることなく過去の旅に取材している。近年の旅もあるが、多くは近代化せず、いまだ路線バスも観光バスも通っていない温泉地をとりあげ、湯に入ることと

酒を飲むことしか楽しみない湯場では、下戸の自分は退屈極まりない、などと自嘲しつつも楽しげに語っている。写生帖から判断する限り、千帆の大規模な旅は昭和三十二年までであり、連載はそれに代わるように始まるのだが、没後刊行分を除いた三十一本のうち、十九本に写生帖との関連が見いだされた(表3)。写生帖を参照した形跡のないものはほぼ漫画調の人物に限られ、使用率は高い。たとえば第二十六巻第九号の「法師」では写生帖 no. 4 にスケッチを採し、挿画に「まだ改造されない頃の法師の浴場」と記している。第二十七巻第八号の「上諏訪」の場合は、三十年以上前の写生帖 no. 1 にまで遡っている。とはいえ結びが生じるケースもあり、写生帖 no. 13 に材を求めた第二十八巻第十号の「山代」では、同温泉が「今も尚奥床しい古風を守つて」おり、それゆえのリピーターが多いと綴つた後、以下のように続けている。

ここまで書いたところで温泉八月号を見たら、この山代で今度観光センターというものが出来るという記事があつて驚いた。これは今迄書いて来た山代の最も山代らしからぬものだが、さすがの山代にも現代の新風がかくの如く吹き込んで来ているのかと驚いたのだ。この山代温泉にして既に然りだ。近代甚だめまぐるしく脱皮、変貌する活潑な温泉場を、古い記憶を辿つて書く事には大きい矛盾がある訳だ。到底動き躍進する温泉場を描く事は出来ない相談かも知れない。読者は寛容にして、この山代温泉にもこんないい面もあつたという事を賢察されたい。従つて他の毎月つづけている温泉風物も同じである。

千帆の死は、本号が世に出た翌月、昭和三十五年十一月十七日のことであつた。翌年一月刊行の『温泉』には最後の原稿として「画と文 温泉風物(白浜)―遺稿」が掲載されたが、ここでも「大資本大規模な大温泉境になつて了つた」「隔世どころか、ここ程大きく変つた所は先ず他にはあるまい」といった語句が並び、自身のかつての旅と現状との乖離を吐露することになった。

『温泉』の発行人であり旅にもしばしば同行した安斎秀夫は、本号に「前川千帆先生のこと」を寄せ、ともにした北海道、北陸、山陰への旅や、千帆の無欲恬淡さや山菜好きな一面を披露している。そして亡くなる約ひと月前に届いた、十月二十日の最後の手紙を引用している。

小生目下下図の如く組上の鯉の心境、近日切腹手術の予定、とうとう病院の仲間入り、連日秋晴好日を窓より眺めて残念、手術したら、あと療養にどこか温泉へと考え中、どこそこといろいろ思い出して僅かに慰めていきます。

「切腹手術」で心臓を衰弱させた千帆は、そのまま帰らぬ人となつたのである。連載「温泉風物」は、回想と現状との隔たりを露呈したとはいえ千帆の温泉観の集大成であり、また最晩年の日々における写生帖の重要性を証するものであつた。『浴泉譜』などで一度描いた図柄を焼き直した可能性も否定できないが、図柄の一致から、写生帖三十冊の少なくとも過半は最晩年の千帆が亡くなる間際まで練つていた、手元にあつた一群と断定できる。安斎への手紙にあるとおり、病床でもありし日の旅を懐古しつつ、頭のなかで写生帖を練つていたかもしれない。

#### ■おわりに

当館が所蔵する前川千帆の写生帖三十冊を紹介し、関連作品を中心に概観した。焼失したとされる戦中までの写生帖がどのように残り、戦後の十数冊とともに伝来したのかは謎のままだが、千帆が最晩年まで手元に置いた貴重な一群であることは確認できた。千帆が残した膨大な仕事を考えれば、失われた写生帖の存在にも気付かされるが、三十冊を読み込むことで、見えてきたことも少

なからずある。「あわてものの熊さん」に代表される漫画で流行作家となった千帆は、昭和十年頃漫画家の看板を降ろして創作版画に軸足を移した。その事実には変わりはない。だが、写生帖からは木版画家としての作品―『版画浴泉譜』や『閑中閑本』、数々の一枚摺を支えた、古くは東京漫画会にまで遡る、漫画家時代の人脈を活かした旅という背景が浮かび上がる。とりわけ日本温泉協会機関誌『温泉』の存在が重要であり、その後景には、戦後の好景気や座談会という形式の流行もあつたであろう。千帆は、同誌第二十四巻第四号の「温泉宿へもの申す」のなかで、自身の旅には「温泉協会としての事前工作がしてあり、何処へ行つても大変な歓待で、お尻がクスグツたくなるような」ものと、「単独のお忍び」で行くものとの二種類があると書いている。従つて、メディア主催の旅ばかりを強調すると偏りが生じるのも事実だが、千帆が両者の間でバランスをとりながら制作していたことは疑いない。木版画家前川千帆を語る時、漫画家時代からの流れの理解なくしては、版業を、また作家像をも見誤ることになるのだろうか。

註

- 1 展覧会期…七月十三日(火)〜九月二十日(月祝)／入場者数…七、二八一人
- 2 『前川千帆名作展』図録(財団法人平木浮世絵財団リツカー美術館、一九七九年九月)および『平木コレクション』による。前川千帆展『図録 千葉市美術館、二〇二一年七月』。前者は千帆没後初の大幅回顧展の図録であり、また本稿でしばしば言及することになる『版画浴泉譜』全五冊の全巻を掲載して貴重である。なお、後者について以下言及する場合は、『図録二〇二二』と略する。
- 3 前川千帆『閑中閑本 第十九冊 山野雜草帖』(日本愛書会、一九五七年夏)の前書きに「戦時中危く／なつた頃 友人の厚意で四国の八幡浜の銀行の大金庫へ保護／してもらつたおかげで今に重宝で／あり唯一の財産である／これはその中の抜粋である」と記されている。なお写生帖については、千帆自身による昭和初年の文章に「本函の中に堆高いスケッチブック」との言及があり(『画集・野外小品の味噌』『版画CUB』第一年第三号、一九二九年五月)、また吉田漱は「何百冊というスケッチブック」が「ほとんどみな戦災で失われ」と記している(前川千帆・その資質と作品『前川千帆名品展』図録、註2)。また千帆は二十代から日記をつけていたが、それも戦災で焼けたという(前川千帆『山村だより』

- 4 『藝術寫真研究』第二十四巻第十二号、一九六〇年十二月)。  
たとえば昭和十六〜十八年に使用された写生帖no.14とno.15をもとに、同二十二年岡山において、『閑中閑本 第三冊 記録紙漣帖』が完成している。
- 5 昭和十六年に第一作『版画浴泉譜』が版行され、三十四年の第五作『統統統版画浴泉譜』まで連刊された。各集に二十図を取め、総数は百図を数える。なお写生帖と『版画浴泉譜』の関係については、先行論文として森山悦乃「前川千帆と温泉―版画浴泉譜の世界」がある(『図録二〇二二』)。「版画浴泉譜」の各冊については『図録二〇二二』186、187、320―322を参照。
- 6 吉田前掲論文、註3
- 7 石子順『日本漫画史』上巻(大月書店、一九七九年)、一〇四頁
- 8 『図録二〇二二』の年譜において、琵琶湖を巡る旅を大正十五年早春と記載したが、ここに訂正したい。
- 9 連作『閑中閑本』は戦後まもなく第一冊が完成し、昭和三十五年初夏の第二十六冊まで連刊された。千帆が亡くなる間際まで手がけられ、没後に未完成のまま刊行された第二十七冊を含め、連作『版画浴泉譜』とともに千帆の版業を代表するシリーズとなった。「閑中閑本」については『図録二〇二二』214、253、353、366を参照。
- 10 「まえがき」『閑中閑本 第四冊 北越雪見帖』(日本愛書会、昭和二十三年春)
- 11 吉田漱は千帆の温泉への関心について、大正十一年の日本創作版画協会第四回展に《別所温泉》を出品した頃からとしている(前掲論文、註3)。
- 12 軽井沢へは、昭和四年六月十六日の夜行で訪れている(『版画CUB』第一年第四号、一九二九年八月)。
- 13 以下の八つのタイトルが列記されている…「旧軽井沢道」「浅間山 杵掛への橋の所、雪の景」「軽井沢町 夏」「落葉松と離山(道より)」「別荘より」「草津鉄道とコルフリング」「三笠ホテル近辺」「白樺」「日本風景版画 軽井沢之部」については『図録二〇二二』95を参照。
- 14 この時の講演については、現時点では検証できていない。
- 15 森山前掲論文、註5、十八頁。なお志茂が見たという法師温泉に取材した木版画は、現時点では特定できていない。
- 16 このエピソードは後年の『温泉風物 湯田中、安代、渋』温泉』第二十八巻第五号(一九六〇年五月)でも披露されている。
- 17 『版画浴泉譜』遠刈田』の文章に、一部が採用されている。
- 18 森川については不詳。
- 19 山崎斌『日本草木染譜』(染織と生活社、一九八六年 ※一九六一年刊の復刻)年譜より。千帆は山崎の著書の装幀・挿画も手がけ、山崎は昭和二十一年に抄紙を始めて千帆の『草木抄』を刊行するなど、親交は続いた。また千帆の死に際して山崎は、『前川千帆 版画を中心にして』の画業、その他(月明会出版部、一九六一年)を編み、その死を悼んでいる。
- 20 山口進は大正十四年から旧制第一高等学校の二高寮務掛として勤務し、一高画会で絵を教えており(『東京大学駒場博物館所蔵品展 餽頭・柏・オリブ 山口進の画業と交友』東

京大学駒場博物館、二〇一四年三月)、その縁であろう。写生帖には「先行山口」とあり、山口が先に現地入りしていたことがわかる。

21 森山前掲論文、註5、二十一頁。

22 《版画浴泉譜 松の山》の文章に、一部が採用されている。

23 「坂本」は阪本牙城か、「森島」は森島直造か。

24 『満蒙風物即興』は国会図書館デジタルコレクションとしてインターネット公開されている。

25 前川千帆「抄紙即笑止」『書物展望』第十三巻第二号(一九四三年二月)。小野忠重も戦争末期の千帆について、「前川千帆は生漉和紙がほしくて、けんめいに再製紙を試みたが、うまくいかなかった、とものに話してくれた」と語っている(『近代日本の版画』三彩社、一九七一年、九十七頁)。

26 《続版画浴泉譜 温泉津》の文章でも「夢二が居たら喜びさうな」と書いている。

27 このエピソードは後年の『温泉風物三朝』『温泉』第二十八巻第四号(一九六〇年四月)でも紹介されている。

28 《続版画浴泉譜 沓掛》の文章に、一部が採用されている。

29 《続版画浴泉譜 湯村》の文章に、一部が採用されている。

30 日本温泉協会は、温泉の研究と振興を目的に、昭和四年十二月に設立された半官半民の団体。内務省と鉄道省の後援を受けており、昭和六年より社団法人となった。『温泉』はその機関誌として昭和五年四月に創刊され、戦中休刊するも昭和二十三年復刊した(『日本温泉協会70年記念誌』社団法人日本温泉協会、一九九九年)。千帆が旅をともした安齋秀夫は同誌の編集者である。千帆の旅と『温泉』の関係については後述。

31 《続版画浴泉譜 平湯》の文章に、一部が採用されている。

32 《続版画浴泉譜 中の湯》の文章に、一部が採用されている。

33 出席者は漫画家四名と安齋秀夫(『温泉』編集長、平田直司(東奥館社長))。

34 この訪問も『温泉』(箱根小涌谷点描(絵と文))、表1参照の取材であろう。

35 たとえば昭和四年の写生帖no.2と関連する昭和二十五年の『関中関本 第八冊 東西島々帖』、同五年のno.5と関連する昭和二十九年の『同 第十四冊 第二浴泉余情帖』、同五〇六年

36 のno.7に関連する三十三年の『同 第二十二冊 蝦夷風物帖』がある。

37 池部とは十一回、宮尾とは十三回旅をともし、両名ともにしたのは八回を数える。写生帖no.23ではふたりの名を「池宮」と略記しており、常連ふりと親しさがしのばれる。

千帆が『温泉』の常連となった経緯は詳らかでないが、戦後復刊してまもない第十六巻第二号から宮尾しげが参加し、以後頻繁に寄稿しており、その縁と考えてよいだろうか。なお『温泉』の取材先が『続統』『続統統』『続統統版画浴泉譜』に關係することは、すでに森山悦乃氏の指摘がある。森山前掲論文、註5、十九頁。

表1 千葉市美術館所蔵・前川千帆の写生帖

凡例:

- ・本表において「前川千帆展」とは「平木コレクションによる 前川千帆展」(2021年7月13日～9月20日、於千葉市美術館)をさす。
- ・作品名の後の3桁の数字は、『平木コレクションによる 前川千帆展』図録の出品番号である。
- ・雑誌記事の場合、特記がなければ執筆者は千帆である。
- ・「人名」とは、写生帖に記録のある人名である。詳細不詳の人名については「 」付きで示した。

写生帖 no.1		使用時期	大正12-15年(1923-26)/35-38歳頃		
サイズ(cm)	13.0×18.5×0.5	技法	鉛筆、色鉛筆、ペン、水彩		
枚数	42枚	「前川千帆展」出品番号	054	『前川千帆展』掲載画像	054a(p.53), 054b(p.41)
表紙画像		題字	震災、ノ琵琶湖、竹生島ノ諏訪湖 大正十五年二月 東京千駄ヶ谷ノ五四九前川千帆		
		概要	関東大震災直後のスケッチ、大正13年春以前の琵琶湖周辺の旅(関ヶ原、賤ヶ岳、余呉湖、竹生島)のスケッチ、大正15年2～3月の諏訪湖への旅のスケッチ、カルタの下絵とおぼしき人物略画などを収める。		
		関連作品	『大震災画集』日本漫画会著、金尾文淵堂刊、大正12年、063 『画家の眼：震災画譜』黎明社編集部編、黎明社刊、大正12年 ※堂本印象他著 《雪の余呉湖》木版多色摺、大正13年、037 「温泉風物 上諏訪」『温泉』第27巻第8号(昭和34年8月)		
		人名			
		備考・特記事項	左開き/2枚切り取られている。 文房堂製スケッチブック 終盤にカルタの下絵とおぼしき漫画調の人物略画が6枚ほど続くが、筆致の違いから後年のものと思われる。		
写生帖no.2		使用時期	昭和4年(1929)/41歳頃		
サイズ(cm)	13.5×18.5×1.2	技法	鉛筆、ペン、水彩		
枚数	78枚	「前川千帆展」出品番号	129	『前川千帆展』掲載画像	129a, 129b(p.86)
表紙画像		題字	越後の雪ノ二度めの越後ノ牛と風ノ佐渡ノ軽井沢ノ別府		
		概要	昭和4年2月(15～21日)と6月(4～12日)の、二度の越後への旅のスケッチが中心。ほかに『新東京百景』や『日本風景版画 軽井沢之部』のためのスケッチ、別府への旅のスケッチなどを収める。		
		関連作品	《新東京百景 工場地帯(本所)》木版多色摺、昭和4年、084 『日本風景版画 軽井沢之部』木版多色摺、昭和4年、095 共著「特輯読み物(漫画紀行)越後から佐渡へ」『婦女界』第40巻第2号(昭和4年8月) 『閑中閑本 第四冊 北越雪見帖』木版多色摺、昭和23年、217 『閑中閑本 第八冊 東西島々帖』木版多色摺、昭和25年、221 「雪国」『山と溪谷』第131号(昭和25年4月)		
		人名	水島爾保布、田中比左良、宮尾しげを、中島六郎、京屋金介、「永田氏」、池部鈞、幸内純一、清水対岳坊、細木原青起		
		備考・特記事項	左開きのスケッチブックを右開きで使用したか/9枚ほど破り取られている。 文房堂製スケッチブック		
写生帖no.3		使用時期	昭和4年(1929)/41歳頃		
サイズ(cm)	18.7×13.3×0.4	技法	鉛筆、墨、水彩		
枚数	40枚	「前川千帆展」出品番号	130	『前川千帆展』掲載画像	130a, 130b(p.86)
表紙画像		題字	山陰と隠岐ノ昭和四年九月十五日ノ廿五日 宮津ノ天の橋立ノ松江ノ大社ノ日御碕ノ隠岐ノ立木観音ノ東京近景の一部ノ千住、雑司ヶ谷ノ目白 同行ノ水島爾保布ノ清水対岳ノ宮尾しげをノ近藤飴ん坊ノ細木原青起ノ前川千帆		
		概要	何葉かの東京風景と、昭和4年9月(15～25日)の山陰と隠岐への旅のスケッチを収める。		
		関連作品	『閑中閑本 第八冊 東西島々帖』木版多色摺、昭和25年、221		
		人名	水島爾保布、清水対岳(坊)、宮尾しげを、近藤飴ん(ン)坊、細木原青起		
		備考・特記事項	右開き		



写生帖no.4		使用時期	昭和3-5年(1928-30)頃／40-42歳頃	
サイズ(cm)	19.5×14.2×0.7	技法	鉛筆、ペン、水彩	
枚数	55枚	「前川千帆展」出品番号	131	『前川千帆展』掲載画像 131a, 131b(p.87)
表紙画像 		題字	昭和五年／○上州法師、桐屋又／○信州講演行／○佐原／○台場／○芝浦／○函根	
		概要	昭和3年3月頃代々木山谷町に転居してまもなく使い始めた写生帖か。昭和5年5月(2～4日か)の法師温泉への旅、同年同月(10～14日)の長野県への講演旅行の際のスケッチ、《工場地帯1》《工場地帯2》『新東京百景』の草稿などを収める。	
		関連作品	《工場地帯1》木版墨摺、昭和4年、081／《工場地帯2》木版墨摺、昭和4年、082 《新東京百景 深川木場》木版多色摺、昭和5年、088／《同 水上公園(台場)》木版多色摺、昭和5年、089 《水郷》木版多色摺、昭和5年、097 《第五野外小品 草花》木版墨摺、昭和9年、077 《版画浴泉譜 法師》木版多色摺、昭和16年、186(図版掲載なし) 『閑中閑本 第六冊 温泉餘情帖』木版多色摺、昭和24年、219 「三国峠と清水トンネル」『美術新論』第5巻第7号(昭和5年7月) 「番場峠」『美之国』第6巻第7号(昭和5年7月) 「温泉風物 浅間」『温泉』第26巻第7号(昭和33年7月) 「温泉風物 法師」『温泉』第26巻第9号(昭和33年9月)	
		人名	吉井勇、安成二郎、竹久夢二、山崎斌	
		備考・特記事項	右開き／最後の1枚が切り取られている。	
写生帖no.5		使用時期	昭和15年(1930)／42歳頃	
サイズ(cm)	18.5×13.3×0.8	技法	鉛筆、ペン、水彩、色鉛筆	
枚数	64枚	「前川千帆展」出品番号	132	『前川千帆展』掲載画像 132(p.87)
表紙画像 		題字	伊豆大島 昭和五年五月／伊豆西海岸 七月／信州温泉 六月	
		概要	昭和15年5月の伊豆大島への旅、6月(25～28日)の信州温泉巡り、7月の伊豆西海岸への旅のスケッチを収める。	
		関連作品	《海》木版多色摺、制作年不詳、098／《伊豆海岸》木版多色摺、昭和15年頃、099 『いで湯の里 上山田』小冊子、昭和10年、196 《版画浴泉譜 戸倉》《同 野沢》木版多色摺、昭和16年、186(図版掲載なし) 《統版画浴泉譜 渋、安代》／《同 山田》木版多色摺、昭和19年、187(図版掲載なし) 『閑中閑本 第八冊 東西島々帖』木版多色摺、昭和25年、221 『閑中閑本 第十四冊 第二温泉餘情帖』木版多色摺、昭和29年、227 水島爾保布+前川千帆「漫畫 伊豆漫畫行」『旅』第8巻第1号(昭和16年1月) 「温泉風物 湯田中、安代、渋」『温泉』第28巻第5号(昭和35年5月)	
		人名	吉川英治、横山大観、佐久間象山、服部亮英、宮尾しげを、「高口」、池部鈞、水島爾保布、池田永治、細木原青起	
		備考・特記事項	右開き／終盤に4枚ほど白紙あり 雑誌の切り抜きか、下田と大島を結ぶ「菊丸」や伊豆観光地の写真が貼付されている。	



写生帖no.6		使用時期	昭和9-16年(1934-41)頃/46-53歳頃		
サイズ(cm)	19.0×13.2×0.7	技法	鉛筆、墨、ペン、水彩		
枚数	47枚	「前川千帆展」出品番号	201	『前川千帆展』掲載画像	201a, 201b(p.124)
表紙画像		題字	(無題)		
		概要	遠刈田温泉・秋保温泉(宮城県)、赤湯温泉(山形県)、青根温泉(宮城県)のスケッチが中心。途中に塩田の取材をしたとおぼしき四国への旅がはさまれる。青根温泉の覚書には昭和16年2月の日付が残るが、『第五野外小品』や『小部屋』といった昭和9-10年頃の作品の下絵もあり、長い期間にわたり使われたと考えられる。		
		関連作品	《第五野外小品 河》木版墨摺、昭和9-10年、077(図版掲載なし) 《小部屋》木版多色摺、昭和10年、148 《冬の湖》木版多色摺、制作年不詳、149 《版画浴泉譜 遠刈田》《同 青根》木版多色摺、昭和16年、186(《青根》は図版掲載なし)		
		人名			
		備考・特記事項	右開き/塩田に関する切り抜きが多く貼り込まれている。 表紙を別紙が包んでいる(もとの題字は「知多半島/榛名雪/塩田」)。		
写生帖no.7		使用時期	昭和5-6年(1930-31)頃/42-43歳頃		
サイズ(cm)	19.6×13.0×0.8	技法	鉛筆、ペン、水彩、色鉛筆		
枚数	54枚	「前川千帆展」出品番号	202	『前川千帆展』掲載画像	202a, 202b(p.124)
表紙画像		題字	(無題)		
		概要	昭和5年と思われる11月5-10日の黒部峡谷をメインにした旅と、昭和6年と思われる1月10-19日の北海道への旅のスケッチを収める。		
		関連作品	《炭鋏》木版多色摺、制作年不詳、102 《小豆袋と女(北海道)》木版多色摺、昭和6年頃、108 《第四野外小品 橋》木版墨摺、昭和7年/《同 荷物橋》木版墨摺、昭和8年、077(図版掲載なし) 《版画浴泉譜 黒雉》木版多色摺、昭和16年、186 『閑中閑本 第二十二冊 蝦夷風物帖』木版多色摺、昭和33年、235		
		人名	水島爾保布、池部鈞、細木原青起、服部亮英、池田永治、「森川」、相馬御風		
		備考・特記事項	右開き/終盤に8枚白紙あり、3枚ほど切り取りあり 「オカモトキイチ」(岡本帰一)NOTEBOOK		
写生帖no.8		使用時期	昭和10-13年(1935-38)頃/47-50歳頃		
サイズ(cm)	19.3×13.9×0.6	技法	鉛筆、墨、ペン、水彩		
枚数	50枚	「前川千帆展」出品番号	203	『前川千帆展』掲載画像	203a, 203b(p.124)
表紙画像		題字	戸隠山 昭和十、三、/山中湖 昭和十三、七		
		概要	昭和10年3月(17-18日)の戸隠への旅、昭和13年7月(13-16日)の富士五湖への旅のスケッチを中心に収めるが、後年とおぼしき川治温泉や鬼怒川のスケッチも含まれている。		
		関連作品	《姥捨山 月見堂》木版多色摺、制作年不詳 《姥捨》木版墨摺、昭和32年		
		人名	山崎斌、恩地孝四郎、藤森静雄、山口進		
		備考・特記事項	右開き/富士五湖の写真絵葉書や新聞・雑誌の切り抜きなどが貼り込まれている。		

写生帖no.9		使用時期	昭和11-15年(1936-40)／48-52歳頃		
サイズ(cm)	19.6×14.2×0.8	技法	鉛筆、墨、ペン、水彩		
枚数	51枚	「前川千帆展」出品番号	204	『前川千帆展』掲載画像	204a, 204b(p.125)
表紙画像		題字	(無題)		
		概要	昭和11年6月の鬼押出や六里ヶ原への旅、昭和12年春の武蔵嵐山行き、同年3月の苗木城址への旅、同年4月の名古屋城への旅、同年5月の法師温泉への旅のスケッチ、昭和15年秋の石神井三宝池でのスケッチなどを収める。		
		関連作品	《名古屋城》木版多色摺、昭和12年、157／《名古屋城》木版多色摺、昭和13年、158 《一木集IV 石神井三宝池》木版墨摺、昭和123年、260 《浅間山鬼押出し》木版墨摺、昭和30年、297		
		人名			
		備考・特記事項	右開き／裏表紙にペンで「昭和十二年」とあり		
写生帖no.10		使用時期	昭和12、15年(1937、40)／49、52歳頃		
サイズ(cm)	14.5×20.8×0.4	技法	鉛筆、ペン、水彩		
枚数	30枚	「前川千帆展」出品番号	205	『前川千帆展』掲載画像	205a, 205b(p.125)
表紙画像		題字	伊豆 昭和十二年初夏／法師 昭和十五年秋 伊豆 新島 式根島 大島／十二年六月／法師温泉 谷川／十五年十月		
		概要	昭和12年6月(7～10日)の伊豆と大島・新島・式根島への旅、昭和15年10月(15～17日)の法師温泉への旅のスケッチを収める。		
		関連作品	『閑中閑本 第八冊 東西島々帖』木版多色摺、昭和25年、221 「大島拝見」(「島の涼風線 五大漫画家ユーモアコンクール」より)『旅』第14巻第8号(昭和12年8月)		
		人名			
		備考・特記事項	右開き／3枚ほど切り取られている。		
写生帖no.11		使用時期	昭和13-15年(1938-40)／50-52歳頃		
サイズ(cm)	18.4×13.3×0.8	技法	鉛筆、墨、ペン、水彩		
枚数	62枚	「前川千帆展」出品番号	206	『前川千帆展』掲載画像	206a, 206b, 206c, 206d(p.125)
表紙画像		題字	朝鮮 昭和十三年十月／戰場ヶ原 昭和十三年十一月／荘内 昭和十四年正月／松の山温泉 昭和十五年 秋九月		
		概要	京城三越での漫画作品展に関連した昭和13年10月(11～23日)の朝鮮旅行、同年11月(18日前後)の日光戰場ヶ原への旅、昭和14年1月(1～5日)の庄内地方への旅、昭和15年9月(24～26日)の松の山温泉への旅のスケッチを中心に収める。		
		関連作品	《版画浴泉譜 松の山》木版多色摺、昭和16年、186(図版掲載なし) 南賢治著『写真紀行 旅とふるさと』装幀 書籍、光大社、昭和17年、193 《三角ずきん》木版多色摺、制作年不詳、311		
		人名	前田東水、細木原青起、宮尾しげを、中西立頃(の弟)、大島勝太郎、「永田老」		
		備考・特記事項	右開き／2枚ほど切り取られている。 松の山温泉に関連して、景観や「温泉節」「温泉小うた」などの写真が貼付されている。		

写生帖no.12		使用時期	昭和14年(1939)／51歳頃		
サイズ(cm)	19.1×13.0×1.0	技法	鉛筆、墨、ペン、水彩、色鉛筆		
枚数	62枚	「前川千帆展」出品番号	207	『前川千帆展』掲載画像	207a, 207b, 207c(p.126)
表紙画像 		題字	昭和十四年初夏／五月二十二日／六月二十六日／北満蒙古		
		概要	昭和14年5月22日～6月26日の北満洲・蒙古への旅のスケッチを収める。その多くが翌年アオイ書房から刊行された『満蒙風物即興』にオリジナルに近い形で収録されている。		
		関連作品	《呼蘭聖母廟晨鐘樓》木版多色摺、昭和14年／《満洲初夏》木版墨摺、昭和14年／《新京の影画芝居》木版多色摺、昭和14年／《新京の影画芝居》木版・紙版併用多色摺、昭和33年、309 『満蒙風物即興』書籍、アオイ書房、昭和15年、184 水島爾保布+前川千帆「満蒙のぞき」『富士』第12巻第11号(昭和14年9月) 「満洲漫畫断片」『新満洲』第4巻第4号(昭和15年4月) 「満蒙畫帖の内より」『政界往来』第12巻第2号(昭和16年2月) 「見て来た満洲」『旅』第19巻第3号(昭和17年3月) 「北満旅帖の内より」『満洲の印象』風土研究会編 書籍、奉天・吐風書房刊、昭和19年		
		人名	水島爾保布、小野佐世男、池部鈞、細木原青起、宮尾しげを、森島(直造か)、浅田力造、坂本(牙城か)、「永田」、河合良成、「永田(息)」、「勝村氏」、森田久、平川守、今井一郎、「梅林氏」、「渡辺氏」、「矢野氏」、「大槻氏」、「阪水氏」、「貴福老人」、「領事松田氏」、「松永氏」、「手塚氏」、「佐藤氏」、「前田氏」、寺田瑛		
		備考・特記事項	右開き／1枚切り取りあり／他の紙に描いた絵や便箋に記した文章などが、数多く貼り込まれている。		
写生帖no.13		使用時期	昭和15～26年(1940～51)頃／52～63歳頃		
サイズ(cm)	19.2×13.0×0.8	技法	鉛筆、墨、ペン、水彩、青ボールペン		
枚数	28枚	「前川千帆展」出品番号	208	『前川千帆展』掲載画像	208a, 208b (p.126)
表紙画像 		題字	北陸		
		概要	北陸(福井県と石川県)の旅のスケッチ、数葉の東京近郊風景、土肥温泉のスケッチを含む。		
		関連作品	《版画浴泉譜 土肥》木版多色摺、昭和16年、186(図版掲載なし) 《統続版画浴泉譜 芦原》《同 湯涌》木版多色摺、昭和27年、320(図版掲載なし) 《公園の一隅》木版多色摺、昭和30年、296 池部鈞+前川千帆+宮尾しげを+小野左世男「座談會 北陸温泉マンガ行」『温泉』第19巻第6号(昭和26年6月) 山路閑古+前川千帆(画)「土肥温泉」『温泉』第19巻第11号(昭和26年11月) 「温泉風物 芦原」『温泉』第28巻第1号(昭和35年1月) 「温泉風物 山代」『温泉』第28巻第10号(昭和35年10月)		
		人名			
		備考・特記事項	右開き		
写生帖no.14		使用時期	昭和16～17年(1941～42)／53～54歳頃		
サイズ(cm)	19.8×15.6×0.5	技法	鉛筆、墨、ペン、水彩、色鉛筆		
枚数	36枚	「前川千帆展」出品番号	209	『前川千帆展』掲載画像	209a, 209b, 209c(p.127)
表紙画像 		題字	盤梯裏山 十六年秋／吉野梅林 十七年春／軍道紙漉 十七年春		
		概要	昭和16年10月(2～5日)の裏磐梯行、17年3月11日の奥多摩吉野梅林見物、同年3月28日の軍道紙漉の工程見学のスケッチを収める。		
		関連作品	《吉野梅林》木版多色摺、昭和18年、171／《奥多摩吉野梅林》木版多色摺、昭和18年頃、172 『閑中閑本 第三冊 記録紙漉帖』木版多色摺、昭和22年、216 『閑中閑本 第六冊 温泉餘情帖』木版多色摺、昭和24年、219		
		人名	恩地孝四郎、志茂太郎		
		備考・特記事項	右開き／裏表紙に「丸公」(公定価格)マークあり。定価12銭。		

写生帖no.15		使用時期	昭和17-18年(1942-43)/54-55歳頃		
サイズ(cm)	21.0×15.0×0.6	技法	鉛筆、墨、ペン、水彩、色鉛筆		
枚数	38枚	「前川千帆展」出品番号	210	『前川千帆展』掲載画像	210a, 210b(p.127)
表紙画像		題字	鳥山十七年四月/中國旅行十七年四月/湖北 十七年十一月/小川町製紙十八年二月		
		概要	昭和17年4月の那須烏山の紙漉場見学、同年4月(12~21日)の中国地方への旅、同年11月(3日の前後)の湖北への旅、18年2月23日の小川町の製紙指導所見学のスケッチを中心に収める。		
		関連作品	《紙漉場》木版多色摺、昭和17年、169 《続版画浴泉譜 三朝》《同 奥津大釣》《同 湯原砂吹》木版多色摺、昭和19年、187(《奥津大釣》《湯原砂吹》は図版掲載なし) 『閑中閑本 第三冊 記録紙漉帖』木版多色摺、昭和22年、216 『温泉風物 奥津・大釣』『温泉』第26巻第6号(昭和33年6月) 『温泉風物 温泉津』『温泉』第27巻第7号(昭和34年7月)		
		人名	志茂太郎、「松岡氏」、竹久夢二、安倍栄四郎、「久世氏」		
		備考・特記事項	左開き/2枚切り取りあり		
写生帖no.16		使用時期	昭和18、24年(1943、49)頃/55、61歳頃		
サイズ(cm)	21.1×13.9×0.7	技法	鉛筆、墨、ペン、水彩、色鉛筆		
枚数	38枚	「前川千帆展」出品番号	211	『前川千帆展』掲載画像	211a, 211b(p.127)
表紙画像		題字	(無題)		
		概要	昭和18年4月(14~16日)の会津への旅、同年5月(19~29日)の九州・四国への旅、同年(か)11月(4~7日)の長野県への旅のスケッチを中心に収める。疎開から戦後の五年間を暮らした岡山でも、昭和24年に使用した形跡がある。		
		関連作品	《続版画浴泉譜 会津湯の上》《同 鹿沢》《同 杵掛》《同 柝ノ木》《同 湯の児》《同 雲仙》《同 霧島》木版多色摺、昭和19年、187(《会津湯の上》《柝ノ木》《湯の児》《霧島》は図版掲載なし) 《日本女俗選 大原女》木版多色摺、昭和21年、259(図版掲載なし) 『閑中閑本 第六冊 温泉餘情帖』木版多色摺、昭和24年、219 『絵と文 高原に湧く湯二つ』『旅』第29巻第7号(昭和30年7月) 『温泉風物 鹿沢』『温泉』第27巻第2号(昭和34年2月)		
		人名	中島謙吉、「牧水の歌碑建つ」(栄之尾にて)、西村弥三郎		
		備考・特記事項	左開き/2枚切り取りあり		
写生帖no.17		使用時期	昭和26年(1951)頃/63歳頃		
サイズ(cm)	20.0×11.9×0.4	技法	鉛筆、墨、ペン、水彩		
枚数	20枚	「前川千帆展」出品番号	340	『前川千帆展』掲載画像	340a, 340b(p.189)
表紙画像		題字	紀州山陰		
		概要	南紀、山陰、関西への旅の写生をおさめる。年記がないが、関連作品から昭和26年11月(8~16日)の旅と考えられる。		
		関連作品	《続版画浴泉譜 龍神》《同 白浜》《同 椿》《同 湯村》《同 東郷》木版多色摺、昭和27年、320(《白浜》《東郷》は図版掲載なし) 『絵と文 湯村温泉(兵庫県)』『温泉』第20巻第3号(昭和27年3月) 『石見出雲のいで湯の里』『旅』第27巻第5号(昭和28年5月) 『南紀龍神行』『ホテルレビュー』第5巻第45号(昭和29年1月) 『温泉風物 竜神』『温泉』第27巻第3号(昭和34年3月) 『南紀漫画の旅』白濱観光協会、小冊子、昭和28年、338		
		人名			
		備考・特記事項	右開き/2枚切り取りあり		

写生帖no.18		使用時期	昭和22、23年(1947、48)／59、60歳頃		
サイズ(cm)	18.3×17.8×0.5	技法	鉛筆、墨、ペン、水彩		
枚数	17枚	「前川千帆展」出品番号	267	『前川千帆展』掲載画像	267a、267b(p.129)
表紙画像(裏表紙)		題字	(表紙を欠く)		
		概要	疎開し、その後5年を過ごした岡山で使われた写生帖。県内の風景がスケッチされている。		
		関連作品			
		人名			
		備考・特記事項	右開き／表紙を欠き、また3枚ほど切り取られている。		
写生帖no.19		使用時期	昭和25年(1950)／62歳頃		
サイズ(cm)	15.0×17.6×0.7	技法	鉛筆、墨、ペン、水彩		
枚数	18枚	「前川千帆展」出品番号	341	『前川千帆展』掲載画像	341a、341b(p.189)
表紙画像		題字	(無題)		
		概要	昭和25年5月(8～10日か)の奥利根への旅と、同年6月(6～8日)の法師温泉への旅のスケッチを中心に収める。		
		関連作品	《温泉宿二階》木版多色摺、昭和28年、279 池部鈞+前川千帆+宮尾しげを+山路閑古「座談会 川柳と漫画 温泉カクテル」『温泉』第18巻第7号(昭和25年7月)		
		人名			
		備考・特記事項	左開き／手製か／1枚切り取りあり／半分に折って使用したか、中央に折れ跡がある。		
写生帖no.20		使用時期	昭和27年(1952)／64歳頃		
サイズ(cm)	18.9×12.6×0.9	技法	鉛筆、墨、青ボールペン、水彩(か)		
枚数	67枚	「前川千帆展」出品番号	342	『前川千帆展』掲載画像	342a、342b(p.189)
表紙画像		題字	南紀風物／昭和廿七年三月／池部／宮尾／小野／前川／安斉／戸塚／天口子神納／藤崎／新宮細尾		
		概要	昭和27年3月(9～12日か)の南紀への旅のスケッチを中心に収める。		
		関連作品	《浴泉》木版多色摺、制作年不詳、300 《続統版画浴泉譜 越の湯》《同 浦島》《同 湯の峯》《同 川湯》木版多色摺、昭和27年、320(図版掲載なし) 池部鈞+前川千帆+宮尾しげを+小野左世男「座談会 南紀の湯どころ」『温泉』第20巻第6号(昭和27年6月) 「温泉風物 湯の峯」『温泉』第26巻第11号(昭和33年11月) 「温泉風物 勝浦」『温泉』第28巻第8号(昭和35年8月) 「温泉風物 白浜(遺稿)」『温泉』第29巻第1号(昭和36年1月)		
		人名	池部鈞、宮尾しげを、小野佐世男、安斎秀夫、「戸塚」		
		備考・特記事項	右開き		
写生帖no.21		使用時期	昭和26年(1951)／63歳頃		
サイズ(cm)	18.9×12.3×0.6	技法	鉛筆、墨、ペン、水彩、青ボールペン		
枚数	20枚	「前川千帆展」出品番号	343	『前川千帆展』掲載画像	343a、343b(p.190)
表紙画像		題字	(旅程図+上高地・焼岳の地図貼付)		
		概要	昭和26年10月(2～6日)の長野県と岐阜県への旅のスケッチを中心に収める。		
		関連作品	《続統版画浴泉譜 上高地》《同 中の湯》《同 白骨》《同 平湯》木版多色摺、昭和27年、320(図版掲載なし) 「温泉風物 白骨」『温泉』第27巻第10号(昭和34年10月)		
		人名			
		備考・特記事項	右開き		

写生帖no.22		使用時期	昭和28年(1953)／65歳頃		
サイズ(cm)	20.3×12.5×0.8	技法	青ボールペン、鉛筆、水彩、色鉛筆		
枚数	36枚	「前川千帆展」出品番号	344	『前川千帆展』掲載画像	344a(p.190)
表紙画像		題字	(昭和廿八年春 三月二日夜行)／〇湯の川、〇昆布、〇洞爺、〇登別、〇定山溪、〇札幌、〇浅虫、／(三月十日夜行、十一日昼前上野)		
		概要	昭和28年3月(2～11日)の北海道と青森への旅のスケッチを収める。		
		関連作品	《昭和新年》木版多色摺、昭和29年、280 《続続続版画浴泉譜 昆布》《同 湯の川》《同 浅虫》木版多色摺、昭和31年、321(《湯の川》は図版掲載なし) 『閑中閑本 第二十二冊 蝦夷風物帖』木版多色摺、昭和33年、235 池部鈞+宮尾しげを+前川千帆+小野左世男「座談會 道南の温泉—日本風土漫畫會」『温泉』第21巻第6号(昭和28年6月) 「温泉風物 登別」『温泉』第28巻第3号(昭和35年3月)		
		人名	池部鈞、宮尾しげを、小野左世男、「宮本老夫妻」		
		備考・特記事項	右開き／新聞記事、雑誌記事、旅程の青焼の貼付、ホテルのパンフレットの挿込がある。		
写生帖no.23		使用時期	昭和30年(1955)／67歳頃		
サイズ(cm)	17.2×12.7×1.1	技法	鉛筆、墨、青ボールペン、水彩、色鉛筆		
枚数	56枚	「前川千帆展」出品番号	345	『前川千帆展』掲載画像	345a(p.190)
表紙画像		題字	こけし 宮城 山形／小涌園、信州、大湯		
		概要	昭和30年1月(2～4日)の宮城県・岩手県への旅、3月(27～30日)の長野県への旅、8月(1～2日)の箱根小涌園訪問、同月(7～8日か)の新潟県への旅、10月(24～29日)の宮城県・山形県・新潟県への旅のスケッチを中心に収める。		
		関連作品	《露天湯》木版墨摺、昭和30年、291 『閑中閑本 第十六冊 鳴子こけし帖』木版多色摺、昭和30年、229 《続続続版画浴泉譜 鬼首》《同 作並》《同 鳴子》《同 瀬見》《同 肘折》《同 高瀬》木版多色摺、昭和31年、321(《鳴子》以外図版掲載なし) 池部鈞+宮尾しげを+前川千帆+下平廣恵「座談會 信州の温泉」『温泉』第23巻第6号(昭和30年6月) 池部鈞+前川千帆+宮尾しげを「箱根小涌谷点描(絵と文)」『温泉』第23巻第10号(昭和30年10月) 「鬼首と湯田川」『温泉』第23巻第12号(昭和30年12月) 「温泉風物 肘折」『温泉』第26巻第5号(昭和33年5月) 「温泉風物 鳴子」『温泉』第28巻第2号(昭和35年2月)		
		人名	「石井」、中島(謙吉か)、池部鈞、宮尾しげを、「鈴木ケン氏」、安齋秀夫、水島爾保布、「丹青社の渡辺」、「小宮山氏」		
		備考・特記事項	右開き／罫線あり		
写生帖no.24		使用時期	昭和27、29年(1952、54)／64、66歳頃		
サイズ(cm)	20.4×12.8×0.8	技法	鉛筆、墨、青ボールペン、水彩		
枚数	68枚	「前川千帆展」出品番号	346	『前川千帆展』掲載画像	346a, 346b(p.191)
表紙画像		題字	妙義磯部榛名薬師伊香保高崎観音山、昭廿七、十、上旬／小原、鎌先、飯坂、穴原、天王寺、土湯、横向／野地／鷺倉、東山、岩代熱湯、昭和廿九、十一月下旬 ※背に「群馬 福島」とあり		
		概要	昭和27年10月(3～6日)の群馬県への旅、29年11月(22～26日)の福島県・宮城県への旅のスケッチを収める。		
		関連作品	《湖上レクリエーション》木版墨摺、昭和30年、292 《続続続版画浴泉譜 飯坂》《同 岩代、熱海》《同 東山》木版多色摺、昭和31年、321(図版掲載なし) 『閑中閑本 第十四冊 第二温泉餘情帖』木版多色摺、昭和29年、227 池部鈞+前川千帆+宮尾しげを+小野佐世男+味岡益太郎「座談會群馬の温泉を語る」『温泉』第20巻第12号(昭和27年12月) 池部鈞+前川千帆+宮尾しげを+国分嘉米吉+高橋源一「座談會 みちのくの湯の旅」『温泉』第23巻第2号(昭和30年2月)		
		人名	安齋秀夫、池部鈞、宮尾しげを		
		備考・特記事項	右開き／新聞または雑誌の切り抜きを多数貼り込んでいる。		

写生帖no.25		使用時期	昭和27、32、33年(1952、57、58)頃／64、69、70歳頃		
サイズ(cm)	18.9×11.2×0.8	技法	鉛筆、墨、青ボールペン、水彩		
枚数	40枚	「前川千帆展」出品番号	347	『前川千帆展』掲載画像	347a、347b(p.191)
表紙画像 		題字	北海道 青森縣 箱根姥子 伊東		
		概要	昭和27年3月30日(前後)の伊東への旅、32年6月(16～18日頃)の青森県への旅、同年12月(16～17日)の箱根への旅、時期不詳の北海道への旅のスケッチを中心に収める。		
		関連作品	《統統統統版画浴泉譜 阿寒》《同 川湯》《同 温根湯》《同 岳》《同 落合》《同 木賀》《同 姥子》木版多色摺、昭和34年、322(《阿寒》《木賀》以外は図版掲載なし) 『閑中閑本 第二十三冊 富士景觀帖』木版多色摺、昭和34年、236 「岳と湯段、落合と板留」『温泉』第25巻第12号(昭和32年12月) 「温泉風物 岳」『温泉』第28巻第7号(昭和35年7月)		
		人名	西村秀一		
		備考・特記事項	右開き／何らかの書籍から、南賢治の温泉写真を2枚切り貼りしている。		
写生帖no.26		使用時期	昭和27、32、33年(1952、57、58)／64、69、70歳頃		
サイズ(cm)	19.4×11.2×1.0	技法	鉛筆、墨、青ボールペン、水彩		
枚数	27枚	「前川千帆展」出品番号	348	『前川千帆展』掲載画像	348a、348b(p.191)
表紙画像 		題字	大島、竹寺、熱海梅園		
		概要	昭和27年1月(2～4日)の大島への旅のスケッチ、昭和32年4月8日の塔の沢温泉・湯本温泉のスケッチ、同年10月(28～29日)の竹寺のスケッチ、同年12月24日の熱海梅園のスケッチ、33年1月4日の青梅でのスケッチなどを収める。		
		関連作品	《民踊》木版・紙版併用多色摺、昭和34年、315 《屋敷の庭》拓摺、制作年不詳、318 《統統統統版画浴泉譜 熱海》木版多色摺、昭和34年、322(図版掲載なし) 『閑中閑本 第二十三冊 富士景觀帖』木版多色摺、昭和34年、236 「箱根塔之沢の阿弥陀寺まつり(絵と文)」『温泉』第25巻第5号(昭和32年5月) 「温泉風物 熱海」『温泉』第27巻第12号(昭和34年12月)		
		人名	鈴木活、海老名雄二、池部鈞、宮尾しげを、「新倉青年」、茂木惣兵衛、中島(謙吉か)、宮本(重良か)、本間(鉄雄か)、宮岡(貞三郎か)		
		備考・特記事項	左開き／秋田民踊に関する雑誌切り抜きや、別紙のスケッチ(昭和32年春の京都に取材か)が貼り込まれている。		
写生帖no.27		使用時期	昭和29年(1954)／66歳頃		
サイズ(cm)	18.2×9.0×0.6	技法	鉛筆、青ボールペン、水彩		
枚数	32枚	「前川千帆展」出品番号	349	『前川千帆展』掲載画像	349a、349b(p.192)
表紙画像 		題字	京都		
		概要	昭和29年4月の京都への旅のスケッチを収める。		
		関連作品			
		人名	本阿弥光悦		
		備考・特記事項	右開き		



写生帖no.28		使用時期	昭和29年(1954)頃／66歳頃	
サイズ(cm)	18.3×9.5×0.5	技法	鉛筆、青ボールペン、水彩	
枚数	32枚	「前川千帆展」出品番号	350	『前川千帆展』掲載画像 350a, 350b(p.192)
表紙画像 		題字	近郊 だるま／1954.5.	
		概要	5月(5、8、10日頃)の東京近郊スケッチ、埼玉県越谷町大里でのだるま作り見学のスケッチを取める。	
		関連作品	『閑中閑本 第二十一冊 張子だるま帖』木版摺折本、昭和33年、234	
		人名	中村千代松	
		備考・特記事項	右開き／表見返・裏見返あり／だるまに取材した写真の貼込みあり	
写生帖no.29		使用時期	昭和30-32年(1955-57)頃／67-69歳頃	
サイズ(cm)	12.7×18.3×0.7	技法	鉛筆、墨、ペン、青ボールペン、水彩	
枚数	63枚	「前川千帆展」出品番号	351	『前川千帆展』掲載画像 351a, 351b, 351c(p.193)
表紙画像 		題字	(無題)	
		概要	昭和30年(か)11月の群馬県湯島温泉のスケッチ、昭和31年2月3日の大倉山梅園のスケッチ、同年(か)11月(18～22日)の宮城県、山形県、福島県を巡る旅のスケッチ、昭和32年5月(23～25日)の群馬県猿ヶ京温泉のスケッチ、同年(か)6～7月(25～1日)にかけての宮城・盛岡・秋田・青森・福島県を巡る旅のスケッチなどを取める。	
		関連作品	《山の見える部屋》木版・紙版併用多色摺、制作年不詳、282 《続続続続版画浴泉譜 下風呂》《同 大湯》《同 岬々》木版多色摺、昭和31年、321(図版掲載なし) 『閑中閑本 第二十三冊 富士景観帖』木版多色摺、昭和34年、236	
		人名	佐藤仁右エ門(不忘閣)、宮尾しげを、「本名洋一氏」、「佐藤孝也氏」、天江富弥、今村(秀太郎か)	
		備考・特記事項	左開き／2枚破り取られている／《山の見える部屋》の下絵が貼り込まれている 文房堂製スケッチブック	
写生帖no.30		使用時期	昭和28年(1953)／65歳頃	
サイズ(cm)	18.8×12.7×0.7	技法	青ボールペン、鉛筆、墨	
枚数	44枚	「前川千帆展」出品番号	352	『前川千帆展』掲載画像 352a, 352b(p.193)
表紙画像 		題字	九州 28 10月 武雄／嬉野／長崎／小浜／雲仙／島原／戸下／杖立／別府	
		概要	佐賀県・長崎県・熊本県・大分県の温泉を巡った旅のスケッチを取める。昭和28年10～11月(21～1日)に訪れたと思われる。	
		関連作品	『閑中閑本 第十四冊 第二温泉餘情帖』木版多色摺、昭和29年、227 池部釣＋前川千帆＋宮尾しげを「座談會 北九州温泉めぐり」『温泉』第22巻第1号(昭和29年1月) 「温泉風物 雲仙」『温泉』第28巻第11号(昭和30年11月)	
		人名	池部釣、宮尾しげを、池田可宵、野中忠太	
		備考・特記事項	右開き／別紙に描いたスケッチや、雑誌の切り抜きと思われる温泉地の写真が、10枚ほど貼り込まれている。	

表2 『温泉』(日本温泉協会機関誌)の記事と写生帖、『版画浴泉譜』の対応関係

	巻号数	発行年月	記事名 ※著者の表記のないものは表1を参照	写生帖	写生帖の使用時期	関連する『版画浴泉譜』の作品
1	第18巻第7号	昭和25年7月	「座談会 川柳と漫画 温泉カクテル」	no.19	昭和25年	
2	第18巻第8号	昭和25年8月	宮尾しげを+前川千帆「納涼漫画温泉のお化け」			
3	第18巻第10号	昭和25年10月	岸本水府+前川千帆「温泉十二景」			
4	第19巻第6号	昭和26年6月	「座談会 北陸温泉マンガ行」	no.13	～昭和26年頃	『統統版画浴泉譜』—《芦原》《湯涌》
5	第19巻第11号	昭和26年11月	山路閑古+前川千帆「土肥温泉」	no.13	～昭和26年頃	
6	第20巻第1号	昭和27年1月	池部鈞+前川千帆+宮尾しげを+小野佐世男「温泉風土記」	no.13	～昭和26年頃	
7	第20巻第1号	昭和27年1月	天野弱平+前川千帆「草津よいとこ」			
8	第20巻第3号	昭和27年3月	「絵と文 湯村温泉(兵庫県)」	no.17	昭和26年頃	『統統版画浴泉譜』—《湯村》
9	第20巻第6号	昭和27年6月	「座談会 南紀の湯どころ」	no.20	昭和27年	『統統版画浴泉譜』—《越の湯》《浦島》《湯の峯》《川湯》
10	第20巻第11号	昭和27年11月	前川千帆「伊東温泉で出陣料理を見る」			
11	第20巻第12号	昭和27年12月	「座談会 群馬の温泉を語る」	no.24	昭和27、29年	
12	第21巻第2号	昭和28年2月	池部鈞+前川千帆+宮尾しげを+小野佐世男「山陰の出湯を訪ねて」			
13	第21巻第5号	昭和28年5月	前川千帆「温泉宿十景」			
14	第21巻第6号	昭和28年6月	「座談会 道南の温泉—日本風土漫画會」	no.22	昭和28年	『統統版画浴泉譜』—《昆布》《湯の川》《浅虫》
15	第21巻第8号	昭和28年8月	惣田勝雄+前川千帆「八さんと熊さん」			
16	第21巻第11号	昭和28年11月	山野一郎+前川千帆「温泉の想ひ出」			
17	第22巻第1号	昭和29年1月	「座談会 九州温泉めぐり」	no.30	昭和28年	
18	第22巻第4号	昭和29年4月	池部鈞+前川千帆+伊東温泉代表者「座談会 伊東みやげ」			
19	第23巻第2号	昭和30年2月	「座談会 みちのくの湯の旅」	no.24	昭和27、29年	『統統版画浴泉譜』—《飯坂》《岩代、熱海》《東山》
20	第23巻第6号	昭和30年6月	「座談会 信州の温泉」	no.23	昭和30年	
21	第23巻第10号	昭和30年10月	「箱根小涌谷点描(絵と文)」	no.23	昭和30年	
22	第23巻第12号	昭和30年12月	前川千帆「鬼首と湯田川」	no.23	昭和30年	『統統版画浴泉譜』—《鬼首》
23	第24巻第4号	昭和31年4月	前川千帆「温泉宿へもの申す(絵と文)」			
24	第24巻第8号	昭和31年8月	池部鈞+前川千帆+宮尾しげを「座談会 宇奈月、平湯、下呂」			
25	第25巻第5号	昭和32年5月	前川千帆「箱根塔之沢の阿弥陀寺まつり(絵と文)」	no.26	昭和27、32、33年	
26	第25巻第12号	昭和32年12月	前川千帆「岳と湯段、落合と板留」	no.25	昭和27、32、33年	『統統版画浴泉譜』—《岳》《落合》

表3 『温泉』（日本温泉協会機関誌）の連載「温泉風物」と写生帖の対応関係

	巻号数	発行年月	記事名 ※著者はすべて前川千帆	写生帖	温泉の取材時期	備考
1	第26巻第5号	昭和33年5月	「温泉風物 肘折」	no.23	昭和30年	
2	第26巻第6号	昭和33年6月	「温泉風物 奥津・大釣」			(洗濯する女性たちを描く)
3	第26巻第7号	昭和33年7月	「温泉風物 浅間」	no.4	昭和15年	
4	第26巻第8号	昭和33年8月	「温泉風物 土肥」			(裸の子供たちを描く)
5	第26巻第9号	昭和33年9月	「温泉風物 法師」	no.4	昭和15年	
6	第26巻第10号	昭和33年10月	「温泉風物 日光湯元」			(船上の人々をメインに描く)
7	第26巻第11号	昭和33年11月	「温泉風物 湯の峯」	no.20	昭和27年	
8	第26巻第12号	昭和33年12月	「温泉風物 別所」			(《版画浴泉譜 別所》と同じ図柄)
9	第27巻第1号	昭和34年1月	「温泉風物 青根」	no.6	昭和16年	
10	第27巻第2号	昭和34年2月	「温泉風物 鹿沢」	no.16	昭和18年	
11	第27巻第3号	昭和34年3月	「温泉風物 竜神」	no.17	昭和26年頃	
12	第27巻第4号	昭和34年4月	「温泉風物 栃尾又」			「お手曳き爺さん」
13	第27巻第5号	昭和34年5月	「温泉風物 指宿」			(砂湯に入る人々を描く)
14	第27巻第6号	昭和34年6月	「温泉風物 酸カ湯」			「酸ヶ湯温泉の奇人」
15	第27巻第7号	昭和34年7月	「温泉風物 温泉津」	no.15	昭和17年	
16	第27巻第8号	昭和34年8月	「温泉風物 上諏訪」	no.1	大正15年	
17	第27巻第9号	昭和34年9月	「温泉風物 梨木」			(落馬する千帆を描く)
18	第27巻第10号	昭和34年10月	「温泉風物 白骨」	no.21	昭和26年	
19	第27巻第11号	昭和34年11月	「温泉風物 平湯」			
20	第27巻第12号	昭和34年12月	「温泉風物 熱海」	no.26	昭和32年	
21	第28巻第1号	昭和35年1月	「温泉風物 芦原」	no.13	昭和26年	
22	第28巻第2号	昭和35年2月	「温泉風物 鳴子」	no.23	昭和30年	
23	第28巻第3号	昭和35年3月	「温泉風物 登別」	no.22	昭和28年	
24	第28巻第4号	昭和35年4月	「温泉風物 三朝」			
25	第28巻第5号	昭和35年5月	「温泉風物 湯田中・安代・渋」	no.5	昭和15年	
26	第28巻第6号	昭和35年6月	「温泉風物 別府」			(茹卵を作る人・それを見る人 を描く)
27	第28巻第7号	昭和35年7月	「温泉風物 岳」	no.25	昭和32年	
28	第28巻第8号	昭和35年8月	「温泉風物 勝浦」	no.20	昭和27年	
29	第28巻第9号	昭和35年9月	「温泉風物 那須八幡」			(馬に驚く人を描く)
30	第28巻第10号	昭和35年10月	「温泉風物 山代」	no.13	昭和26年	
31	第28巻第11号	昭和35年11月	「温泉風物 雲仙」	no.30	昭和28年	
32	第29巻第1号	昭和36年1月	「画と文 温泉風物(白 浜)―遺稿」	no.20	昭和27年	

## Introducing works from the Collection: Sketchbooks of Maekawa Senpan (Abstract)

Nishiyama Junko

Maekawa Senpan (1888-1960) is known as a leading *Sosaku hanga* (“creative print”) artist of modern-period Japan. Although he first found success as a Manga artist, he worked in parallel on woodblock prints. From around 1935 he turned to woodblock prints, and received high acclaim for his serene and at the same time, humorous creations. The Chiba City Museum of Art has 30 sketchbooks used by Senpan from the end of the Taisho Era (1912-1926) into the post-war period in its collection. This paper introduces them through a summary, and aims to shed light on related works and to reveal an image of the artist.

This paper begins by putting together basic data about the 30 sketchbooks in table format (period, technique, summary, related works). It next gives a short description of the content of each sketchbook, introduces important illustrations, and quotes accompanying notes that show his attitude as an artist. As a result, various events – in particular, several records of travel around hot springs - have been identified which can supplement Senpan’s biography. There have been many discoveries regarding related works, such as single prints and the series “Hanga yokusen fu (Hot spring notes, print collection)”, “Kanchu kanpon (Leisure time leisure books)”, and work for magazines. From Senpan’s notes, too, we can observe him warmly gazing upon the old-style, rustic hot springs, and those anonymous people keeping them in business. Then, post-war, we find him regretting the great changes to hot spring spots through modernization and tourism, and his concerns over the difficulty in portraying them.

The most important discovery in the sketchbooks is the record of many trips supported by media. Particularly remarkable is the coverage of trips for the magazine of the Japan Onsen Association, *Onsen*, and many of the works in “Hot spring notes, print collection” can be seen emerging from that project. “Hot spring notes, print collection”, then, ought to be considered the by-product of *Onsen*. Furthermore, comparison of the sketchbooks and *Onsen* reveals their close connection with the series “Onsen scenes and manners” in the same magazine which Senpan wrote in his last years. It has become clear that more than half of the 30 sketchbooks were to hand and referred to by Senpan just before his death, and as such are a valuable set of works.

Senpan had been a popular Manga artist represented by “Awatemono no kuma-san”, when in around 1935 he moved his axis to creative prints. There is no difference to this fact. However, a comprehensive view of the sketchbooks gives rise to a background of a media-backed journey making use of contacts from his time as Manga artist that date back as far as the Tokyo Manga Association, and which supported his work on “Hot spring notes, print collection”, “Leisure time leisure books”, and numerous single-sheet woodblocks prints. The conclusion is that the presence, here, of the magazine of the Japan Onsen Association, *Onsen*, is of particular importance, and understanding of the chain of events since his time as Manga artist is essential when discussing Maekawa Senpan, the woodblock print artist.